南串山町文化財調査報告書第２集

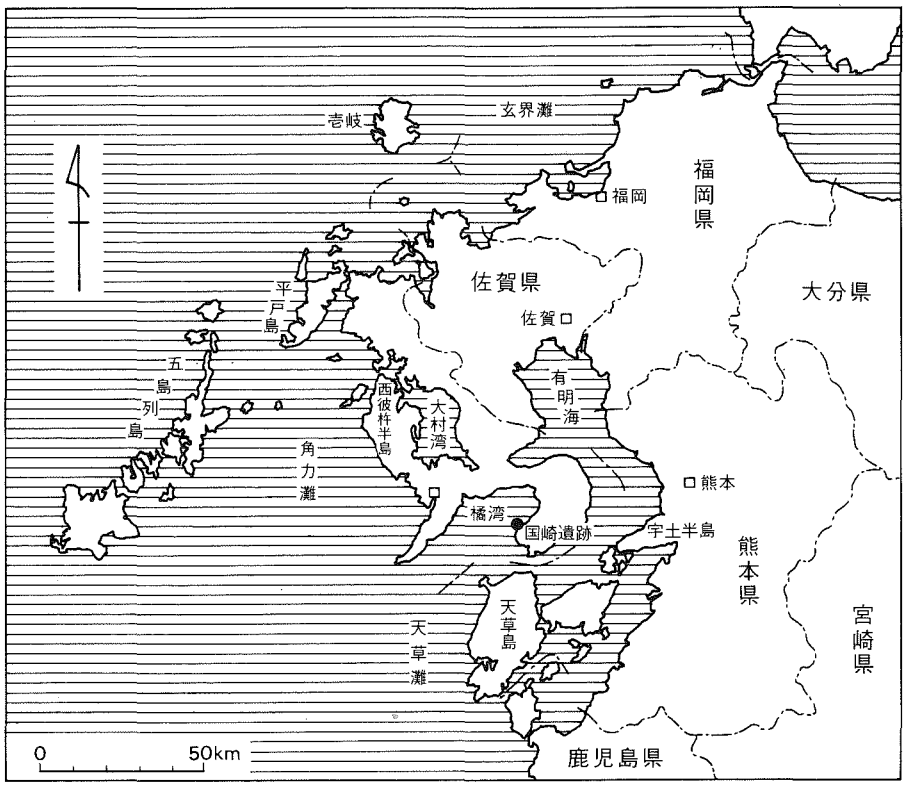
国　崎　遺　跡

１９８９

長崎県南串山町教育委員会

南串山町文化財調査報告書第２集

国崎遺跡



発刊にあたって

このたび昭和63年度の事業として、昭和63年９月19日から９月30日まで12日間発掘調査いたしました南串山町国崎遺跡の調査結果を報告書として発刊することになりました。

国崎遺跡は島原半島の南西部を占める南串山町の西端に位置する国崎半島から、さらに北東にのびた砂礫丘に立地するところで、ハマユウ・ハマカズラ等特有の植物が自生し、海山の自然環境は、県立自然公園にも指定され、長崎県景勝百選の中にも入っているところで、夏はキャンプ・海水浴・磯釣で広く人々に親しまれています。

遺跡は、昭和58年度の遺跡周知事業による分布調査の際に発見され、縄文時代から中世にかけての遺物と古墳の可能性のある石室状の落ちこみが確認されました。

昭和61年度には県立自然公園の整備に伴う休憩舎一棟の建設に先立って発掘調査を実施し、昭和63年度は今後の県立自然公園整備計画に先立ち、遺跡の保存、活用の基礎資料を得るために国庫補助事業による遺跡の範囲確認調査を実施しました。

調査は長崎県教育庁文化課にお願いし、その結果、縄文時代・奈良・平安時代の遺物や人骨が発見され、この地で生活を営んだ先人の面影を偲ぶに足る貴重な文化遺産です。

今後、南串山町の貴重な文化遺産を守るためにも、開発と保存の調整を図りたいと思います。

最後に、今回の調査実施にあたり、種々ご指導とご助言を賜わりました県文化課、そしてこの調査の作業に従事していただいた皆さんに衷心より感謝の意を表し発刊のあいさつといたします。

平成元年３月31日

南串山町長　寺田　勝衛

例　　言

1．本書は、昭和63年度の国庫補助事業として実施した、長崎県南高来郡南串山町丙１番地に所在する国崎遺跡の範囲確認調査の報告書である。

2．調査は、南串山町教育委員会が事業主体となり、県教育委員会が調査を担当し、昭和63年９月19日～９月30日（12日間）に実施した。

3．調査関係者

南串山町教育委員会	竹下嘉明	教育長
	渡部満喜	教育次長
	木村一徳	社会教育係長
長崎県教育庁文化課	宮崎貴夫	主任文化財保護主事
	小野ゆかり	文化財調査員

4．本書は分担執筆され、長崎県立北高校の山本愛三先生から貝類に関して、長崎大学医学部第二解剖学教室の松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信先生から人骨に関しての、それぞれ玉稿をいただいた。

Ⅰ、Ⅱ－１・２・３（１）ｂ～ｅ、３（３）、Ⅲを宮崎

Ⅱ－３（１）ａ、３（２）を小野

Ⅳ－１を松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信

Ⅳ－２を山本愛三が執筆。

5．本書の編集は、小野・宮崎による。

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境 …… 1
1．遺跡の立地 …… 1
2．歴史的環境 …… 1

Ⅱ　調　　査 …… 3
1．経　緯 …… 3
2．調査概要 …… 3
(1) 包蔵状況の調査 …… 3
(2) 古墳の確認調査 …… 7
3．遺　物 …… 10
(1) 土　器 …… 10
a．縄文土器 …… 10
b．弥生土器 …… 24
c．古墳時代の土器 …… 24
d．奈良・平安時代の土器 …… 27
e．中世の陶磁器 …… 27
(2) 石　器 …… 30
a．剥片石器 …… 30
b．礫石器 …… 32
(3) その他の遺物 …… 42

Ⅲ　総　　括 …… 46

Ⅳ　自然科学分析の成果 …… 51
長崎県南串山町国崎遺跡出土の縄文時代人骨 …… 53
長崎県国崎遺跡の貝類から見た考察 …… 61

挿　図　目　次

第１図　国崎遺跡の位置 …… 2
第２図　高来郡の駅路推定図 …… 2
第３図　国崎遺跡調査区域図（１／1500） …… 4
第４図　土層断面図（1／60） …… 折込
第５図　Ｃ試掘壙遺物出土状況図・土層断面図（１／40） …… 8
第６図　Ｅ試掘壙　〃　・　〃　（〃） …… 9
第７図　縄文土器①（１／２） …… 11
第８図　〃　②（〃） …… 13
第９図　〃　③（〃） …… 15
第10図　〃　④（１／２・１／４） …… 16
第11図　〃　⑤（１／４） …… 17
第12図　〃　⑥（１／２） …… 19
第13図　〃　⑦（〃） …… 20
第14図　弥生時代～歴史時代の土器①（１／３） …… 25
第15図　〃　②（〃） …… 26
第16図　〃　③（〃） …… 28
第17図　石　器①（２／３） …… 31
第18図　〃　②（〃） …… 33
第19図　〃　③（〃） …… 34
第20図　〃　④（〃） …… 35
第21図　〃　⑤（〃） …… 36
第22図　〃　⑥（１／３） …… 39
第23図　〃　⑦（〃） …… 40
第24図　〃　⑧（〃） …… 41
第25図　その他の遺物（１／２） …… 43
第26図　遺跡の範囲 …… 46

表　目　次

表1　縄文土器観察表 ……21～24
表2　弥生時代～歴史時代土器観察表 ……28～29
表3　剝片石器観察表 ……37
表4　礫石器観察表 ……42

図　版　目　次

図版1　遺跡遠景（南東から）・遺跡近景（東から）……49
図版2　硬玉製垂飾と金環・籾痕付着土器 ……50

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1．遺跡の立地

遺跡は、複輝石安山岩の火山麓地である国崎半島の先端から北東にのびた砂礫丘に立地する。礫丘は、長さ250ｍ、幅100ｍ、標高6ｍほどの小規模で低平な地形である。トンボロ特有の嘴状に曲がった形状で、南東側は内湾に砂浜、北西側は安山岩転石の岩礁になっている。当地は、県立自然公園に指定され、亜熱帯植物の群生で知られており、磯での釣や砂浜でのキャンプ地として利用されている。

2．歴史的環境

今回の調査によって、本遺跡は、縄文時代中期～後期と奈良・平安時代を主体としていることが明確となった。この両期を中心とした遺跡をピックアップしたのが第1図である。

西北九州地域では、縄文中期から後期前半期の遺跡は、海岸部に立地することが多く、橘湾沿岸部付近においても、10～20km間隙で点々と遺跡が存在する状況がみられる。しばしば、貝塚を形成し、遺物の内容面からも漁撈的色彩が濃いことが指摘できる。それらの遺跡では、南九州系あるいは瀬戸内系土器群の流入がみられ、海を媒介とした頻繁な交流を物語っている。しかし、縄文後期後半～晩期前半期になると、島原半島では、海岸部から台地・丘陵上への立地移動がみられる。南串山町内でも、加例川遺跡、溜水遺跡、奥田地脇遺跡などの晩期遺跡が標高200～300ｍの火山性台地に存在している。国崎遺跡において当期の遺物が激減することと対象的な事象であり、生活の拠点が海岸部から内陸部へ移行したことを示している。

奈良・平安時代の様相を観ると、県内でも当期遺跡の発掘は未だ数例ほどしかなく、当時の状況についてはほとんど解明されていないのが現状である。有明町松尾遺跡(註1)は、発掘された数少ない例であるが、8～9世紀の建物跡の柱穴群が検出され、「直」とヘラ描きされた土器やカマド形土器が出土している。発掘資料ではないが、国見町多比良五万長者屋敷では、老司Ⅰ式の瓦が採集されており、瓦の型式から8世紀中頃のものとされている(註2)。当遺跡は廃寺跡である可能性が強い。北東には「高下（こうげ）」という地名があり、郡家の転化としてここに高来の郡衙が推定されている(註3)。『肥前風土記』（高来郡条）には、9郷、21里、4駅、5烽が存在したとされている。『和名抄』には、山田・新居・神代・野鳥の4郷があげられているが、他の5郷は明確でない。鎌倉時代の『河上造営田所渡田惣田数』には、荘園として串山荘（二十丁）の名がみられ、南串山町から小浜付近に比定でき、「郷」が前段階に存在したことも充分に考えられよう。古代官道の西海道高来郡所在の駅は、『延喜式』では、船越・山田・野鳥の3駅に減少しており、廃止によるものか、駅路や駅の位置についても決着をみていない。『延喜式』には、官営牛牧である「早崎牧」もあげられている。また、『肥前旧事』には、天慶8年（945）6月に唐船を肥前国高来郡肥最埼（ひのみさき）警固所の兵士が発見し、大宰府鴻臚館へ回航させたという記事が

あり、その所在地について、野母半島(註4)と口之津(註5)に想定する説がある。

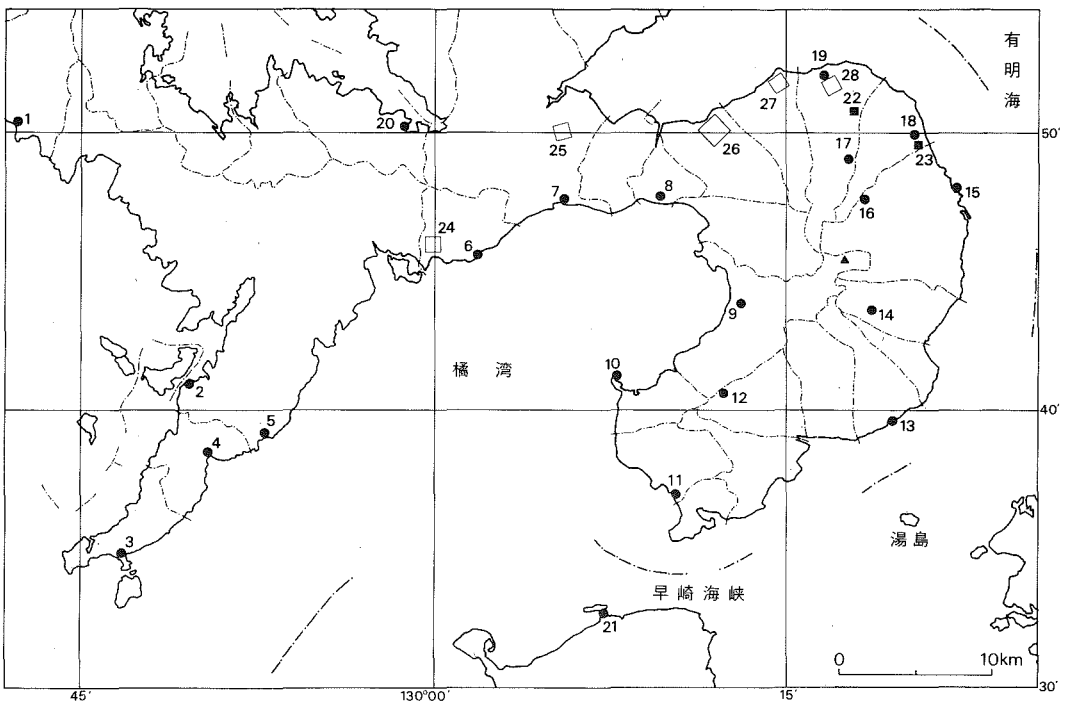
註1　安楽勉「松尾遺跡」『長崎県埋蔵文化財調査集報XI』長崎県文化財調査報告書第91集　長崎県教育委員会　1988

2　小田富士雄「伝五万長者屋敷跡」『九州古瓦図録』　九州歴史資料館　柏書房　1981

3　木下良「肥前国」『古代日本の交通路Ⅳ』　大明堂　1979

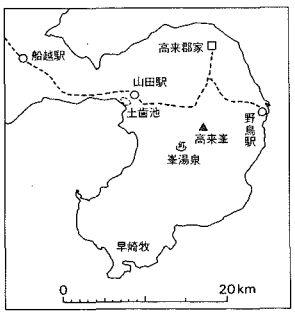
4　瀬野精一郎『長崎県の歴史』　山川出版社　1972　他

5　註3文献。



第1図　国崎遺跡の位置

1 出津(しゅつ)遺跡　2 深堀遺跡　3 脇岬遺跡　4 為石遺跡　5 千々(ちぢ)遺跡　6 下ノ釜貝塚　7 有喜貝塚　8 愛津遺跡　9 朝日山遺跡　10 国崎遺跡　11 永瀬貝塚　12 原山支石墓群　13 堂崎遺跡　14 山の寺遺跡　15 三会下町遺跡　16 礫石原遺跡　17 百花台遺跡　18 小原下遺跡　19 筏遺跡　20 伊木力遺跡　21 沖ノ原遺跡　22 五万長者屋敷遺跡　23 松尾遺跡　24 里名条里跡　25 小野条里跡　26 吾妻条里跡　27 伊古条里跡　28 六ノ坪条里跡



第2図　高来郡の駅路推定図

Ⅱ 調　　査

1．経　　緯

国崎遺跡は、昭和58年度の遺跡周知事業による分布調査の際に発見された。公園整備で遊歩道が建設された直後であり、掘り上げられた土砂から、多数の須恵器・土師器と、縄文土器、青磁、滑石製石鍋が採集され、礫丘平坦面では古墳の可能性をもつ石室状の落ち込み数ヶ所が確認され、縄文時代～中世にかけての遺跡として捉えられた。

昭和61年度には、公園整備として、1700㎡の伐開と休憩舎１棟の建設が予定され、休憩舎が埋蔵文化財包蔵地にかかるおそれがあったため、建設に先立って、昭和61年12月15日～12月20日の６日間の緊急調査を実施した。(註1) その結果、奈良・平安時代を中心とした3000点余の遺物の出土がみられ、遊歩道内の平坦地に当期の集落の存在が予想された。

今回の調査は、今後の公園整備計画に先立って、遺跡の広がり、内容を把握し、保存・活用の基礎資料を得る必要があった。そのために、昭和63年度の国庫補助事業として範囲確認調査を実施したものである。

2．調査概要

今回の調査は、遺跡の内容・範囲を確認する包蔵状況の調査と、昭和58年遺跡発見時における古墳と思われる石室状落ち込みの確認調査の二つの目的があった。

（1）包蔵状況の調査（第５～７図）

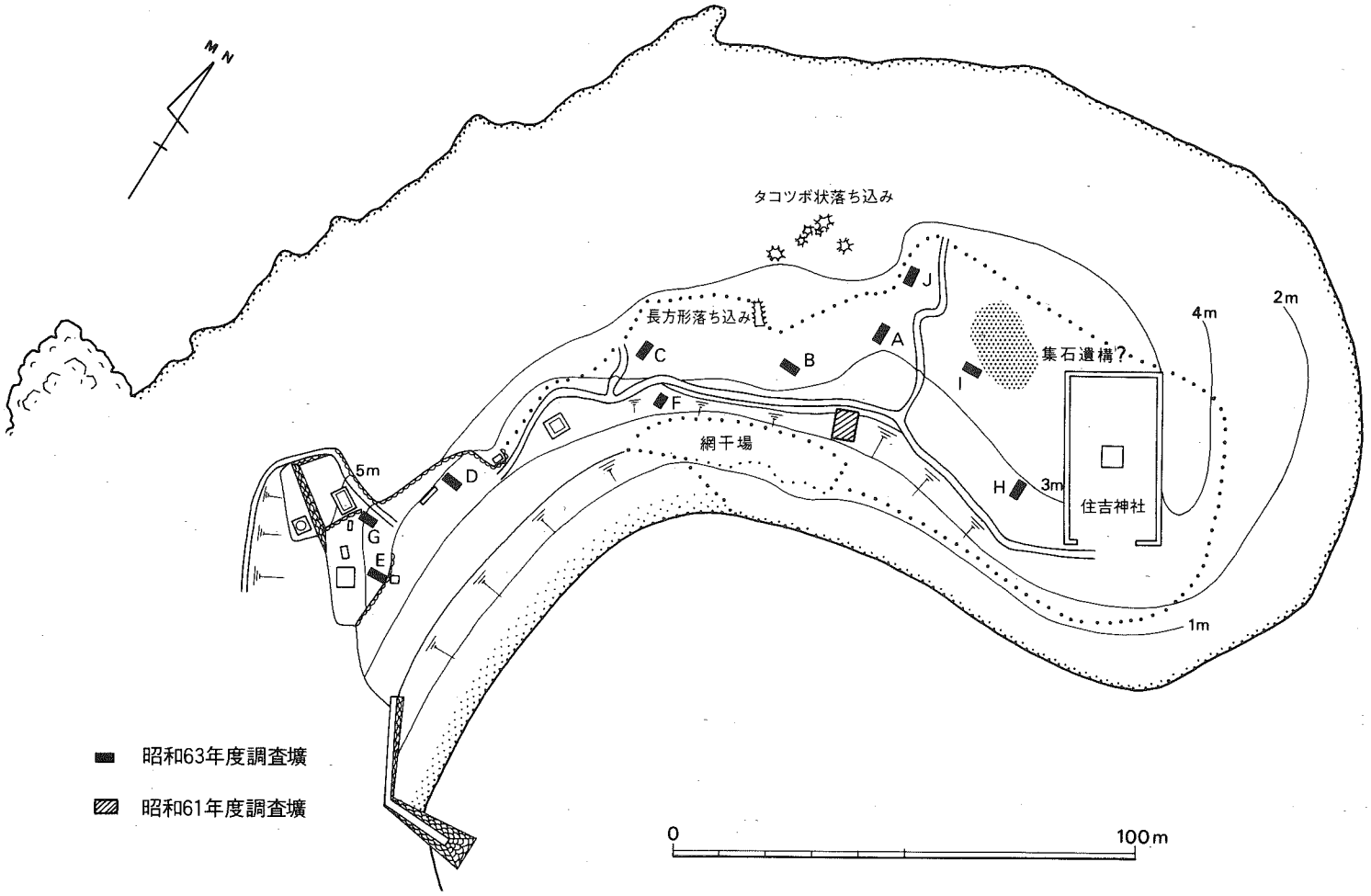
２ｍ×４ｍの試掘壙を９ヶ所、２ｍ×３ｍの試掘壙を１ヶ所の計10ヶ所（Ａ～Ｊ試掘壙）をほぼ方位軸に合せて設定し、78㎡を発掘した（第４図）。

各試掘壙の土層状況をみると、地域的に４つに区別できる。Ａ～Ｃ、Ｈ～Ｊ試掘壙の礫丘平坦面地域、Ｆ試掘壙の傾斜面地域、Ｄ試掘壙の砂浜地域とＥ・Ｇ試掘壙の礫丘基部地域である。

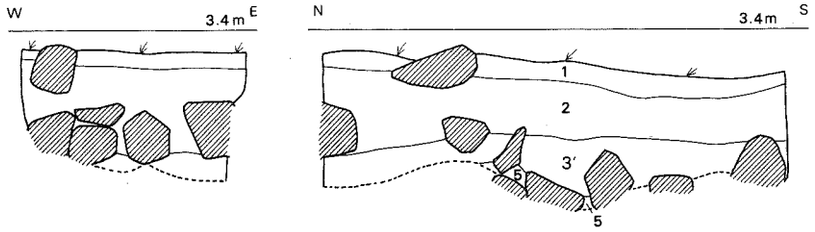
平坦地では基本的に１～５層に分けられる。１層は表土層、２層は暗褐色砂層、３層は黒色砂質土層、４層はにぶい黄褐色砂層、５層はざらざらした褐色砂層である。５層は無遺物層、４層が縄文時代包含層、２～３層が奈良時代～中世の土層である。２～４層には大礫を多量に含んでおり、低平な地形であるために波浪等の自然的な影響を受けていることが考えられる。

Ｃ試掘壙では、3′～４層上部にかけて北東隅に人骨の頭蓋片が集中し、他に骨が散在している状況がみられた。頭骨付近には副葬品と考えられる硬玉製（翡翠）垂飾が出土し、縄文中・後期土器片が付近から出土したが、3′層からは土師器も若干出土しており、人骨も乱れた状況で検出されているところから、自然的攪乱を受けていることが考えられる（第６図）。

傾斜地のＦ試掘壙では１～４層に分けられ、平坦地の１～４層にそれぞれ対比できると考えられる。３層まで奈良・平安時代の遺物が出土しており、４層は縄文時代の包含層か。

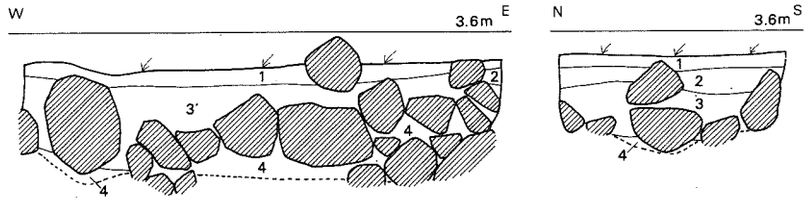


第3図　国崎遺跡調査区域図（1／1500）



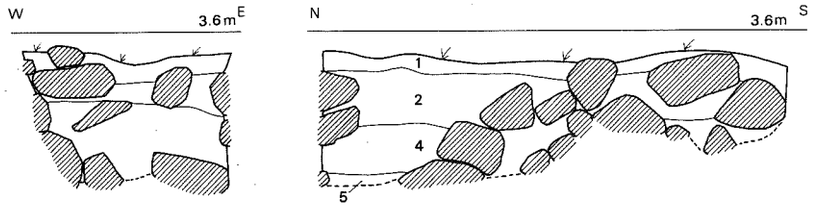
H TP.

1 黒色砂質土層（表土層）
2 黒褐色砂質土層（自然撹乱）
3′ 混礫褐色砂層（自然撹乱）
5 褐色砂層



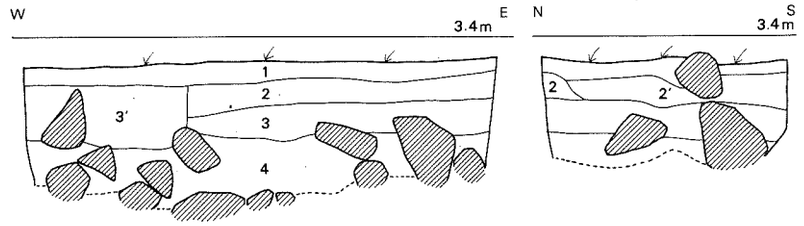
I TP.

1 黒色砂質土層（表土層）
2 暗褐色砂層
3 黒色砂質土層
3′ 暗褐色砂質土層（自然撹乱）
4 混礫にぶい黄褐色砂層



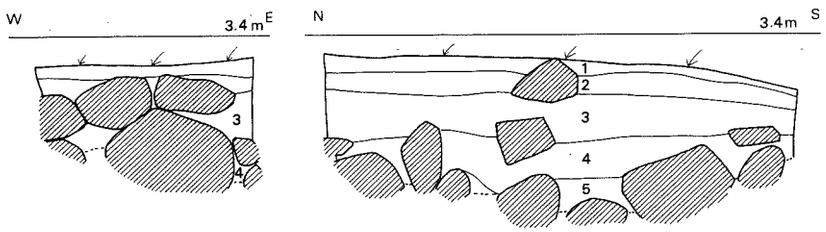
J TP.

1 黒色砂質土層（表土層）
2 褐色砂質土層（黄色味もつ）
4 にぶい黄褐色砂層
5 褐色砂層（黄色味もつ）



B TP.

1 黒色砂質土層（表土層）
2 暗褐色砂層
2′ 暗褐色砂質土層（撹乱層）
3 黒色砂質土層
3′ 混礫黒褐色砂質土層（撹乱層）
4 混礫にぶい黄褐色土層

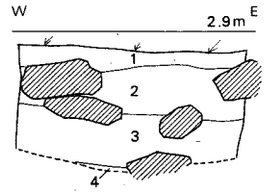


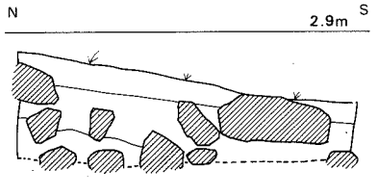
A TP.

1 黒色砂質土層（表土層）
2 暗褐色砂層
3 黒色砂質土層
4 混礫にぶい黄褐色砂質土層
5 褐色砂層

0 2m

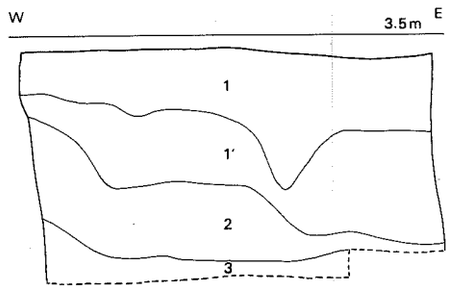
第4図　土層断面図（1／60）





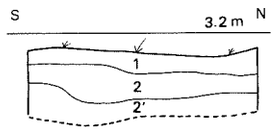
F TP.

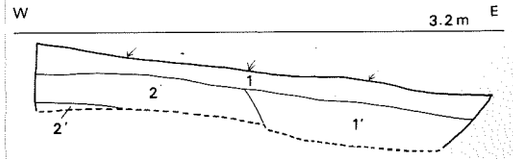
1 黒色砂質土層（表土層）
2 暗褐色混貝砂層
3 混礫褐色砂質土層（黄色味もつ）
4 混礫にぶい黄褐色砂層



D TP.

1 黒褐色砂質土層
1′ 混礫にぶい黄褐色砂質土層
2 暗褐色混細貝砂層
3 黒褐色砂層





G TP.

1 褐色土層（表土層）
1′ 混礫褐色土層（撹乱層）
2 暗褐色粘質土層
2′ 褐色粘質土層（安山岩風化土粒を混在する）

砂浜のD試掘壙は1～3層に分けられる。1層と1′層には最近の品物が混入しており、かなり深くまで攪乱が及んでいる。2層と3層は礫を含まないサラサラした細かい砂層。4層からは縄文土器1点が出土し、縄文時代の包含層の可能性をもっている。

礫丘基部のE・G試掘壙は、国崎半島の山陰に立地するためか自然的な攪乱を受けておらず整層状況で堆積した砂層に縄文土器の大形破片や多数の貝類が包含されており、もっとも良好な包蔵状態がみられた。土層は1～7層に区別され、2層は奈良時代の遺物包含層で、G試掘壙で一括出土がみられた。E試掘壙の3層、3′層、6層が縄文後期の包含層であり、北久根山式土器、石錘2点、削器1点などの石器8点、多量の貝類と若干の獣骨が出土している。ドットマップで遺物採りあげを行ったが、ドットを断面図に投影すると6層として採りあげたものが一部7層にくい込んでくるようである（第7図）。矛盾するが、図面ではそのまま図化した。

包蔵状況の調査の結果、縄文時代中・後期の遺物包含層は、B・C・D？・E・G？試掘壙の5ヶ所で確認され、縄文時代の生活区域が内湾の砂浜に向った砂礫丘の南西部に広がっていることが分った。弥生時代～古墳時代の遺物は少量しか出土しておらず、生活の拠点ではなかったことを示しているが、H試掘壙の3′層から金環が出土している。奈良・平安時代の遺物は全ての試掘壙の1～3層から出土しており、平坦地～基部を中心とした礫丘南東部一帯に広がっていることが考えられる。

（2）古墳の確認調査

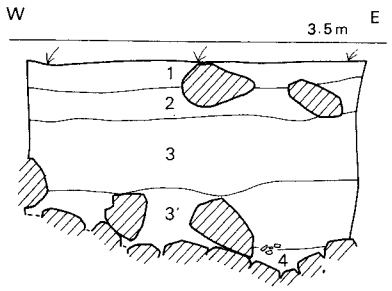
当初古墳の石室らしきものが数ヶ所存在するということであったが、調査対象地域を草刈りし、表面観察による古墳の確認を行った結果、明確に古墳と断定できるものは認められなかった。

B試掘壙北西にある長方形状の石組は、形状的にもっとも古墳に近いものであり、石組内と前面を5㎡ほど発掘した。その結果、石組は古墳としては粗雑なつくりで石の面も揃えておらず、急造らえの感があり、また棺床面も認められなかった。したがって、古墳の石室とは考えられないことが明確となった。

また、大礫が集積する北側には、径1～3mほどのタコツボ状の落ち込みが6ヶ所ほど確認されたが、聞き取りでは当地に本土決戦に備えて予科練が駐屯していたといわれており、石組やタコツボ状の落ち込み（塹壕？）は第二次大戦時の遺構である可能性が高いと思われる。

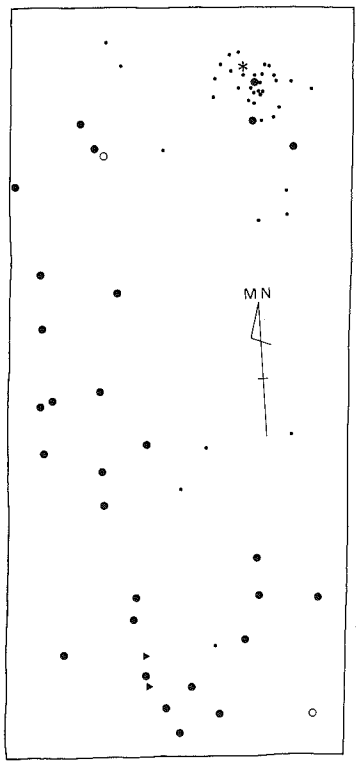
ただ、I試掘壙北側に低く盛り上がった集石状況が20mほどの範囲に確認され、今回余裕が無く調査できなかったので、人為的なものか、自然的な所産か判断できないが、H試掘壙の金環の出土と考え併せると、古墳の可能性が皆無になったというわけでなく、要注意地域として捉えておきたい。

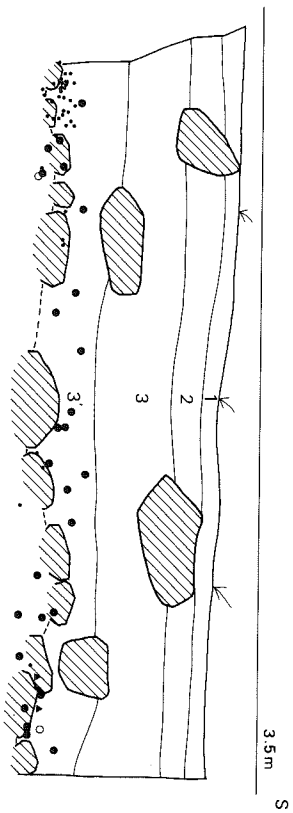
註1　本報告書に所収する予定であったが余裕がなくできなかった。後日、報告の責任を果したい。



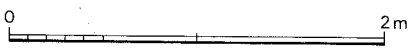
C TP.

1 黒色砂質土層（表土層）
2 暗褐色砂層
3 黒褐色砂質土層
3′ 混礫黒褐色砂質土層（自然攪乱）
4 暗褐色砂層（黄色味もつ）

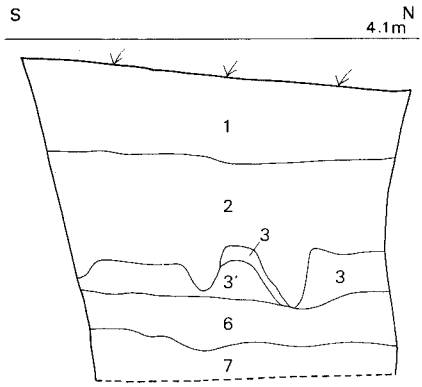




● 縄文土器
○ 土師器
▲ 石　器
・ 人　骨
＊ 硬玉製垂飾

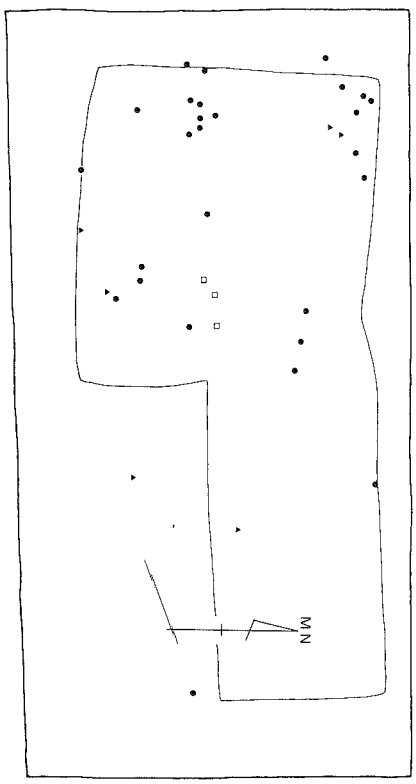


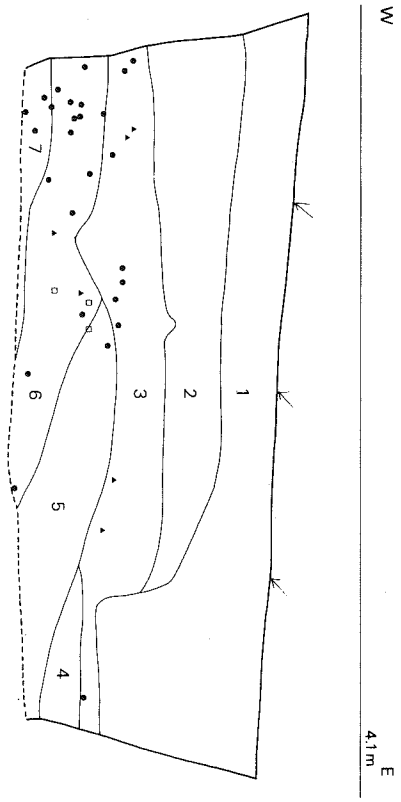
第5図　C試掘壙遺物出土状況図・土層断面図（1／40）



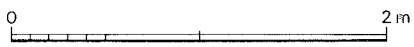
E TP.

1 暗褐色粘質土層（表土層）
2 暗褐色砂質土層
3 にぶい黄褐色混貝砂層
3′ 褐色混貝砂層
4 褐色砂層
5 褐色混細貝砂層
6 暗褐色混貝砂層
7 黒褐色混細貝砂層





● 縄文土器
▲ 石　器
□ 獣　骨



第6図　E試掘壙遺物出土状況図・土層断面図（1／40）

3．遺　物

今回出土した遺物は、パンコンテナ8箱分の量がある。そのうち、縄文時代～近世の土器・陶磁器が大半を占め、縄文時代の石器、貝類、獣魚骨、人骨1体分、硬玉製垂飾、金環、土錘、有孔円盤、円盤状土製品、製塩土器、滑石製石鍋等が出土している。パンコンテナ2箱分出土した貝類の殆んどはE試掘壙から出土したもので、長崎県立北高校の山本愛三先生に分析していただき玉稿をいただいた。また、人骨に関しても長崎大学医学部解剖学第二教室の松下孝幸・分部哲秋・佐伯和信先生から玉稿をいただいた。諸先生方に感謝申し上げます。

（1）土　器（第7～16図）

昭和63年度調査において得た土器・陶磁器は6,720点である。その内訳は、縄文土器1,517点、弥生土器248点、土師器4,008点、須恵器890点、中世土器・陶磁器11点、近世陶磁器46点となる。奈良・平安時代を中心とする土師器と須恵器が72.8%、次に縄文土器が22.6%を占め、他に少量の弥生土器、中世と近世土器・陶磁器が出土していることになる。

a．縄文土器（第7～13図）

この遺跡の縄文土器は、中期から晩期と思われるものまで幅広く出土している。1,517点のうち特徴的な85点を図化し、便宜上次のように分類した。

Ⅰa～d類	並木式	Ⅷ類	三万田式
Ⅱa～d類	阿高式	Ⅸ類	晩期の土器
Ⅲa～b類	坂の下式	Ⅹ類	晩期粗製深鉢
Ⅳ類	南福寺式	Ⅺ類	船元式
Ⅴ類	出水式	Ⅻ類	市来式
Ⅵ類	鐘ヶ崎式	ⅩⅢ類	型式不明
Ⅶa～c類	北久根山式	ⅩⅣa～b類	底部

Ia類（1～4）

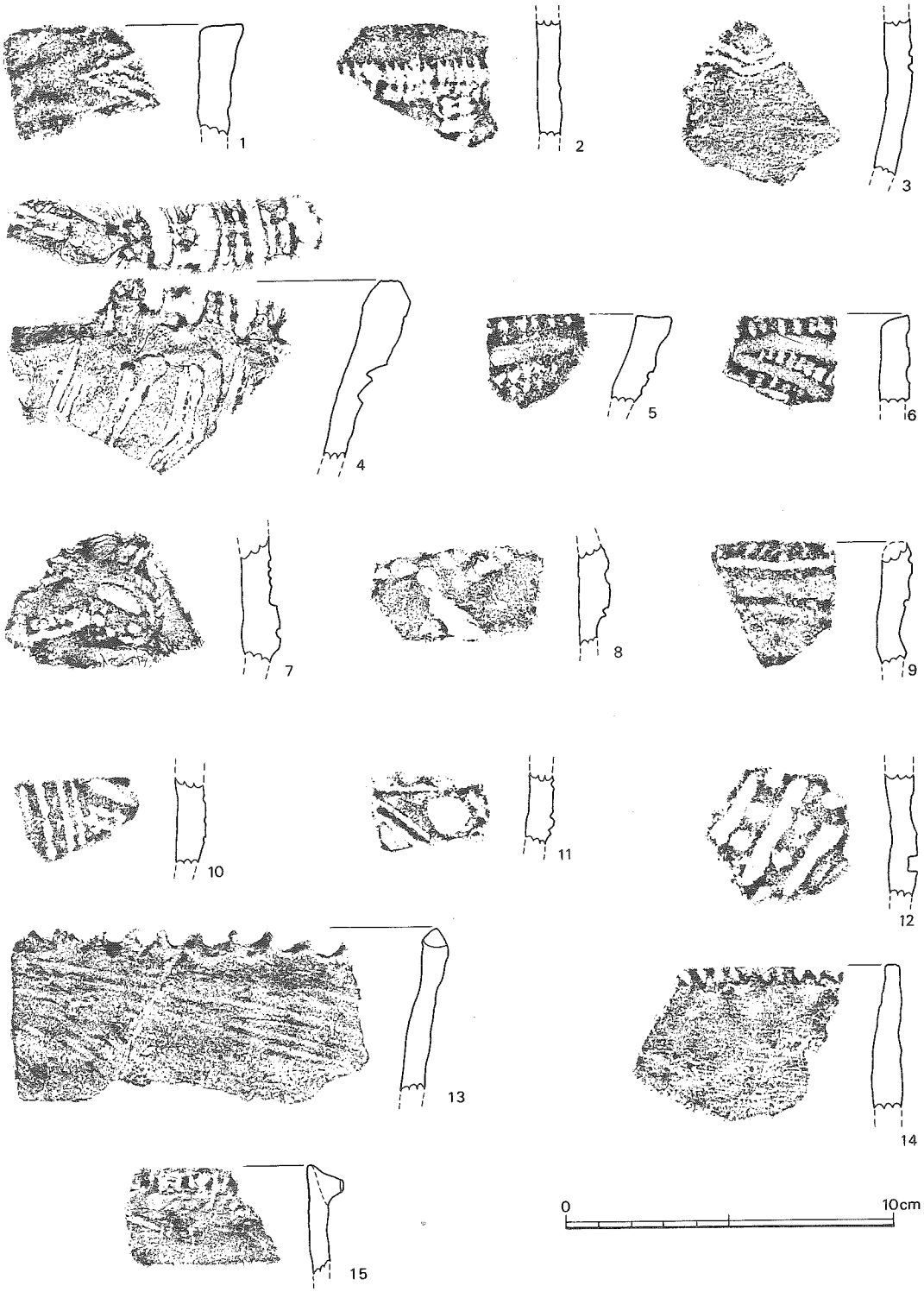
これは、田中氏分類[(註1)]の並木Ⅰ式にあたる。凹線文を持たず、押引文を原則とするものである。1・3は二条沈線で直線的なモチーフを表現、2も魚骨状の押引文で並木Ⅰ式の特徴を呈している。4は肥厚した口縁部に刻目を入れて突起を作り、口唇部には二列の刺突文を施している。また底部に向って、荒い二条の沈線を引いている。このⅠ類は全て滑石を含む。

Ib類（5～8）

押引文あるいは刺突文を施した後、凹線を施すもの。田中氏分類の並木Ⅱ式にあたる。5・6は口縁部であり、口唇部にはそれぞれ押引文・刻目が施されている。また8は、半截竹管文がみられる。6・7では、凹線文によって押引文がつぶされている様子が良く観察できる。

Ic類（9～12）

凹線文を施した後に、刺突文や半截竹管文が施文されたもの。田中氏分類の並木Ⅲ式にあた



第7図　縄文土器①（1／2）

る。9・10にはローリングがみられる。刺突文と凹線の組み合わせである。11は凹線を施した後凹点を細く鋭い二条の沈線で囲むように施文している。12は凹線の間に、直径4㎜程の竹管状施文具により、刺突文が施されている。

Id類（13～15）

並木式土器の粗製深鉢である。13の外面は貝殻条痕がみられる。内面も板状のもので調整されており、両面からの調整により器壁は薄く仕上げられている。口縁部に刻目有り。14もほぼ同様のものである。15は口縁部に突帯を貼付け、そこに刻目を施している。器壁はとても薄く磨かれているようである。

IIa類（16～18）

II類は阿高式土器である。I類の並木式土器と同様に田中氏の分類によった。これは特に、阿高I式と呼ばれているもので、Ic類（並木III式）から半截竹管文・刺突文が消失することにより凹線のみの文様となったものである。その中でも胴部上半部以上に凹線を施していると思われるものが16～18である。16は滑石を多量に含んでいる。凹線は比較的浅く、先端が軽くカーブしている。17は太く深い凹線文様が横位・斜位に施されている。厚く重量感がある。18は波状口縁で縦・横に凹線が入る。

IIb類（19・20）

IIa類（阿高I式）の文様帯が底部まで展開するもの。田中氏分類で阿高II式といわれるものである。縦方向に展開する文様、簡略化する文様などがみられる。19・20は曲線凹文で先端が巴状になっている。またその凹線により内面に凸部が出て凸凹している。

IIc類（21）

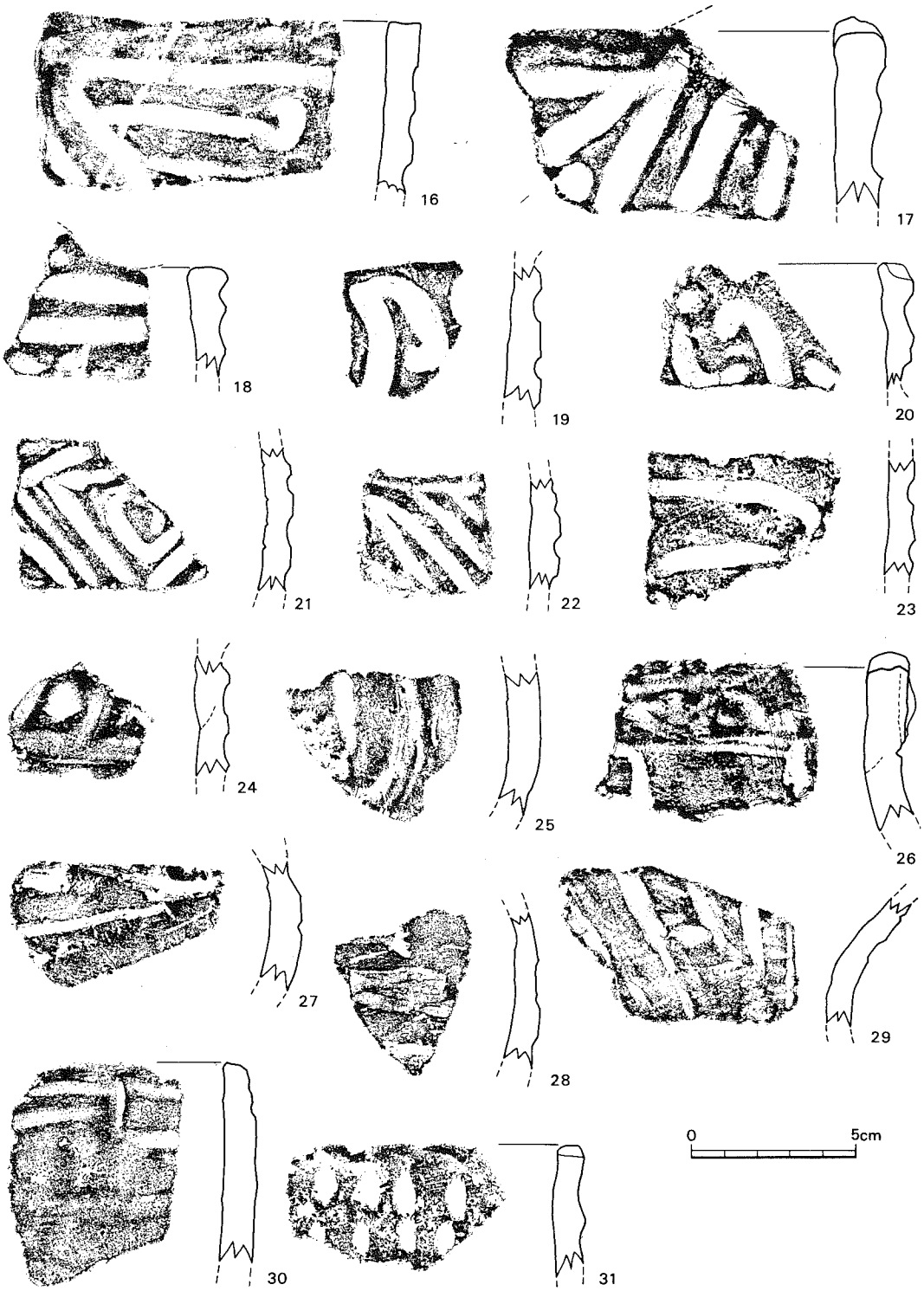
田中氏分類の阿高III式にあたる。特徴として文様帯は口縁部に限られてくる。文様自体も簡略化・直線化が進む。21は幅6㎜程の凹線で菱形を重ねていった文様で、もう一つの特徴である左右対称の展開になると思われる。

IId類（22～25）

IIa～c類に比べ、凹線が浅く細くなってきているものである。粗雑化の傾向であると思われ、阿高式土器の中でも比較的時期が新しいのではないかと考えた。特に25は、粗雑化した凹線が全体に施文されていると予想され、坂の下式土器への移行段階とも考えられる様相を呈している。

IIIa類（26～29）

III類は坂の下式土器と考えられるもので、IIIa類は田中氏分類において坂の下I式とされているものである。凹線は、丸い棒状か板状のものにより施文され、全体に及ぶ。26は口縁部が肥厚し、口唇部には雑な凹線文がみられる。胴部には、引掻いたような荒い沈線で施文している。同様のことが27にも言える。28では、幅1㎝程の板状のもので横位に直線的に文様を施している。29は直線化・細線化した凹線が底部近くまで施文されているものである。



第8図　縄文土器②（1／2）

Ⅲb類（30・31）

施文は口縁部に限られてくる。また、爪先などによってつけられた少しくずれ気味の凹点文を持つものもある。坂の下Ⅱ式と呼ばれるものである。30は口縁部に板状の施文具で浅く文様が描かれており、長方形を組み合わせているようにもみえる。31は凹点土器で、凹点の部分がくずれ気味の楕円形をしている。中央には爪の跡の様な段差を生じている。凹点は、二段で口縁をめぐり、おそらくその下には、凹線が平行に描かれていたのではないかと思われる。口唇部には押圧文もみられる。内面は横位のナデ仕上げである。30もヨコナデで仕上げられており、胎土の木目細かさもあって非常に平滑である。

Ⅳ類（32～34）

南福寺式土器といわれているものである。多様な口縁帯作出を行なっており、文様もさらに粗略化されていく。逆S字状文などもその1つである。32は口縁部が肥厚で外面に段を作っている。33も口縁部が肥厚。外面に段を作っているのも32と同様だが、段は半截竹管状のものできちんと区切られている。肥厚の部分も反りを持っている。34は太めのヘラで「つ」字状に曲線を描く。また突起が連続する部分と突起のない部分が交互に組み合わさる口縁部を持つと思われる。

Ⅴ類（35～39）

出水式土器といわれるものである。口縁部を突帯状に肥厚させたものが多い。35・36ではやや肥厚した口縁部は波状を形成すると思われる。また短く斜めに入る凹線や連点文が施されている。37は、Ⅳ類が退化した様な口縁部がみられる。38は、断面がV字形をした細い施文具で、並列させて縦位に沈線を施文したものである。39では連点文は阿高式系の特徴を持つが、凹線が沈線になってしまっている。

Ⅵ類（40・41）

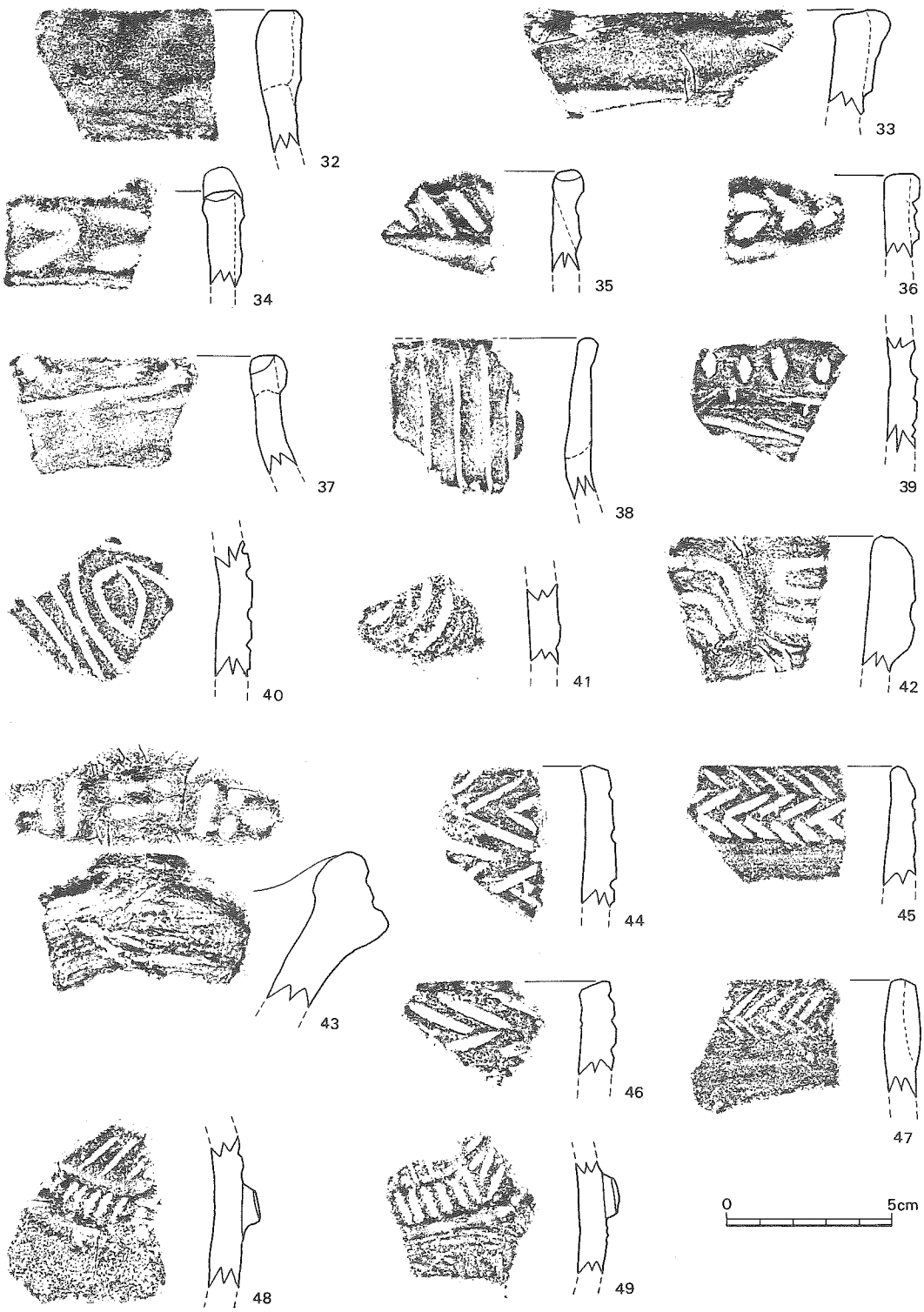
鐘ヶ崎式土器と思われるものである。40は細い棒状の施文具で曲線的な沈線を施したものである。一般的な鐘ヶ崎式土器に比べて、いくらか固さがみられる。41は風化が進んでいる。文様は40と同じく曲線的な沈線文である。

Ⅶa 類（42～53）

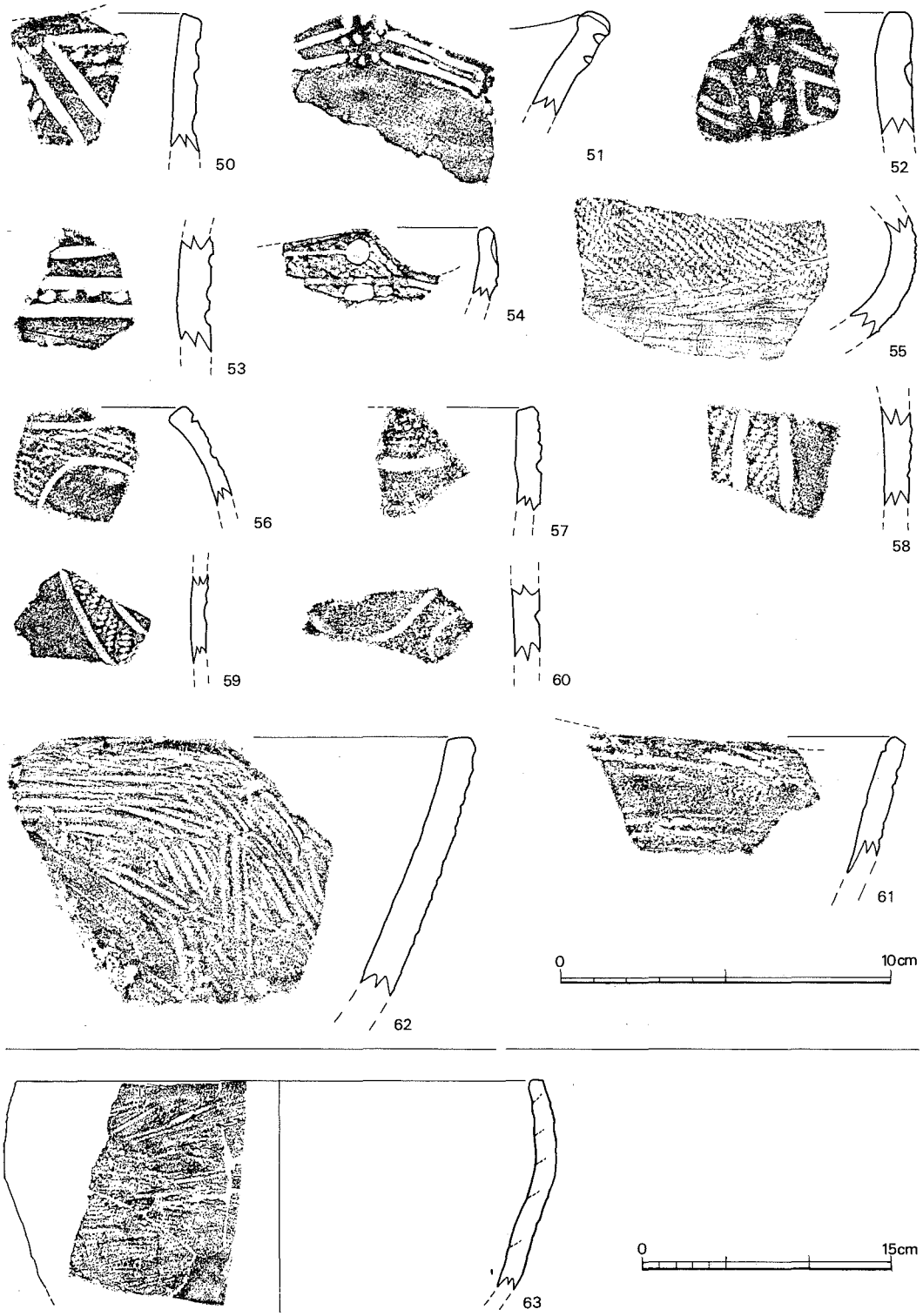
Ⅶ類は北久根山式土器である。文様も種類が豊富なのでここでは前川氏による分類[註2]によった。Ⅶa 類はその中で第一類とされているものである。42・43は口縁部がかなりの肥厚をみせる。丸い棒状施文具による沈線文や刺突文が施されている。44～47では短線による斜線、羽状文が口縁部周辺に施文されている。48・49は粘土紐を貼り付け刻目を入れたもの。またどちらも粘土紐の上位に、斜めに沈線を施している。50～53は棒状または竹管状の施文具による沈線文と刺突文の組み合わせという点で共通している。

Ⅶb類（54～60）

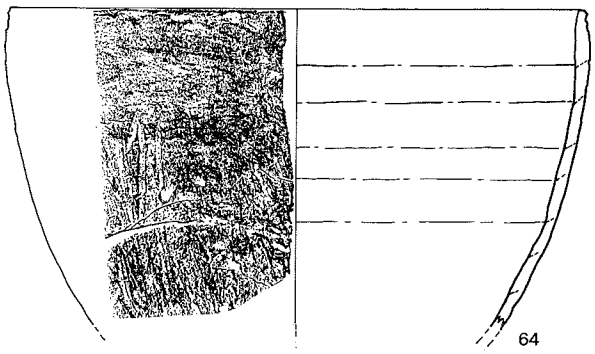
磨消縄文及び疑似縄文を特徴とするもので、前川氏による第二類にあたるものである。54は

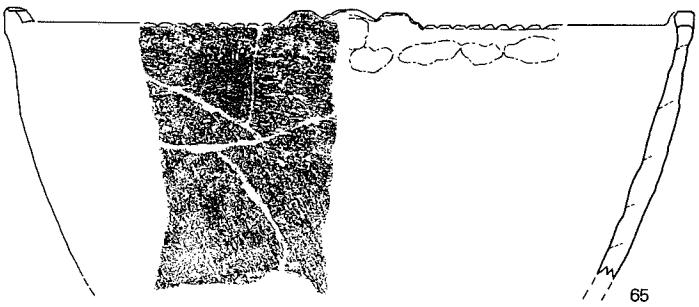


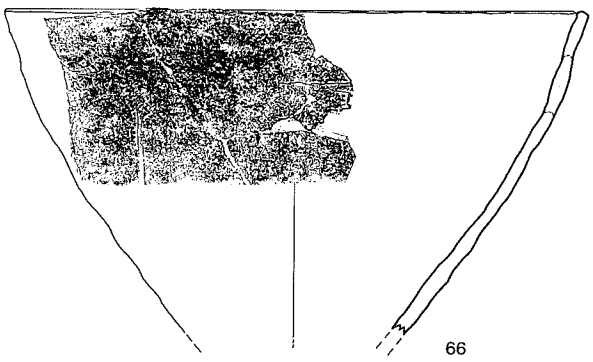
第９図　縄文土器③（1／2）

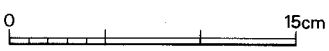


第10図　縄文土器④（1／2・1／4）









第11図　縄文土器⑤（1／4）

この中でも特に堅緻で磨きもみられる。文様も磨消縄文、沈線文、押圧文が施され、非常に丁寧に作られた浅鉢と思われる。55も浅鉢と思われる。丹塗りが残っている。56～60は磨消縄文を施す土器片で、沈線との組み合わせも共通している。ただし59は精製研磨土器といってよく、縄文も、原体を転がさず押圧したものと思われる。

Ⅶc類（61～66）

北久根山式土器の中でも、粗製深鉢と思われるもの。62・63には横位の貝殻条痕がみられる。その他のものは、板状のものでナデて調整している。66はこの中でも粗製よりは半精製に近く、内外面にススの付着しているところもある。

Ⅷ類（67・68）

精製の黒色磨研土器である三万田式土器。67は口縁部であり、口唇部より4㎜下に幅8㎜程の凹線が二条入っている。内外面ともに研磨されている。68は頸部近くの胴部と思われ、二条か三条の沈線がみられる。

Ⅸ類（69）

晩期の浅鉢口縁片と思われる。内外面とも非常に良く研磨されており、口縁部は屈曲して立ち上がっている。

Ⅹ類（70・71）

晩期の粗製深鉢と思われるもの。やや風化を受けているが、どちらも内面はナデ、外面には横位の条痕が施されているのがわかる。71は、破損部位の修理のためか、焼成後に穿孔を行なっている。

Ⅺ類（72・73）

瀬戸内系の土器も僅かであるが出土している。この2点は、船元式土器と思われる。72は、隆帯を貼り付け、その後隆帯間にヘラ状の施文具で、やや荒い沈線を施している。隆帯の付け根に刻目状の連点文もみられる。73は細長い感じの縄文が全面に施されている。

Ⅻ類（74・75）

南九州系のもので市来式土器と思われるもの。74は口縁部に半截竹管状の施文具で三条の沈線を施し、その沈線間に貝殻腹縁部による刺突文を密に埋めこんだもの。75も沈線と貝殻による施文の組み合わせである。

ⅩⅢ類（76）

型式不明の土器。沈線文と刺突文を組み合わせている。襞のような立体的な文様になっている。胎土などからみるとⅫ類に近いかもしれない。

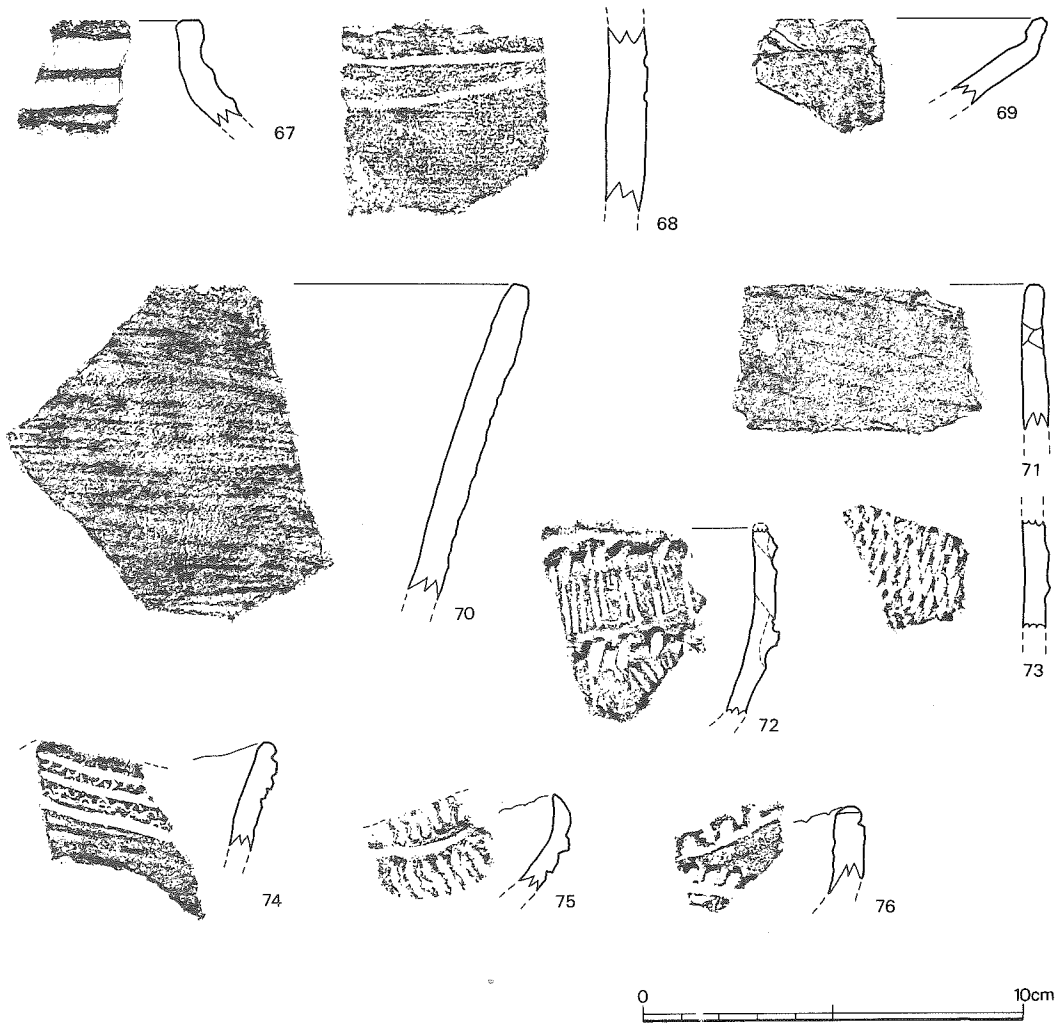
ⅩⅣa類（77～81）

鯨骨を製作台として作られた底部。鯨の脊椎骨の凸凹部分の痕跡がみられる。ただし77のみは、鯨の脊椎骨の平滑な方を使用したと思われる。この鯨骨を製作台として使用する土器は、阿高式土器にしばしばみられる。77～81も滑石を多量に含む胎土でこれに合致する。

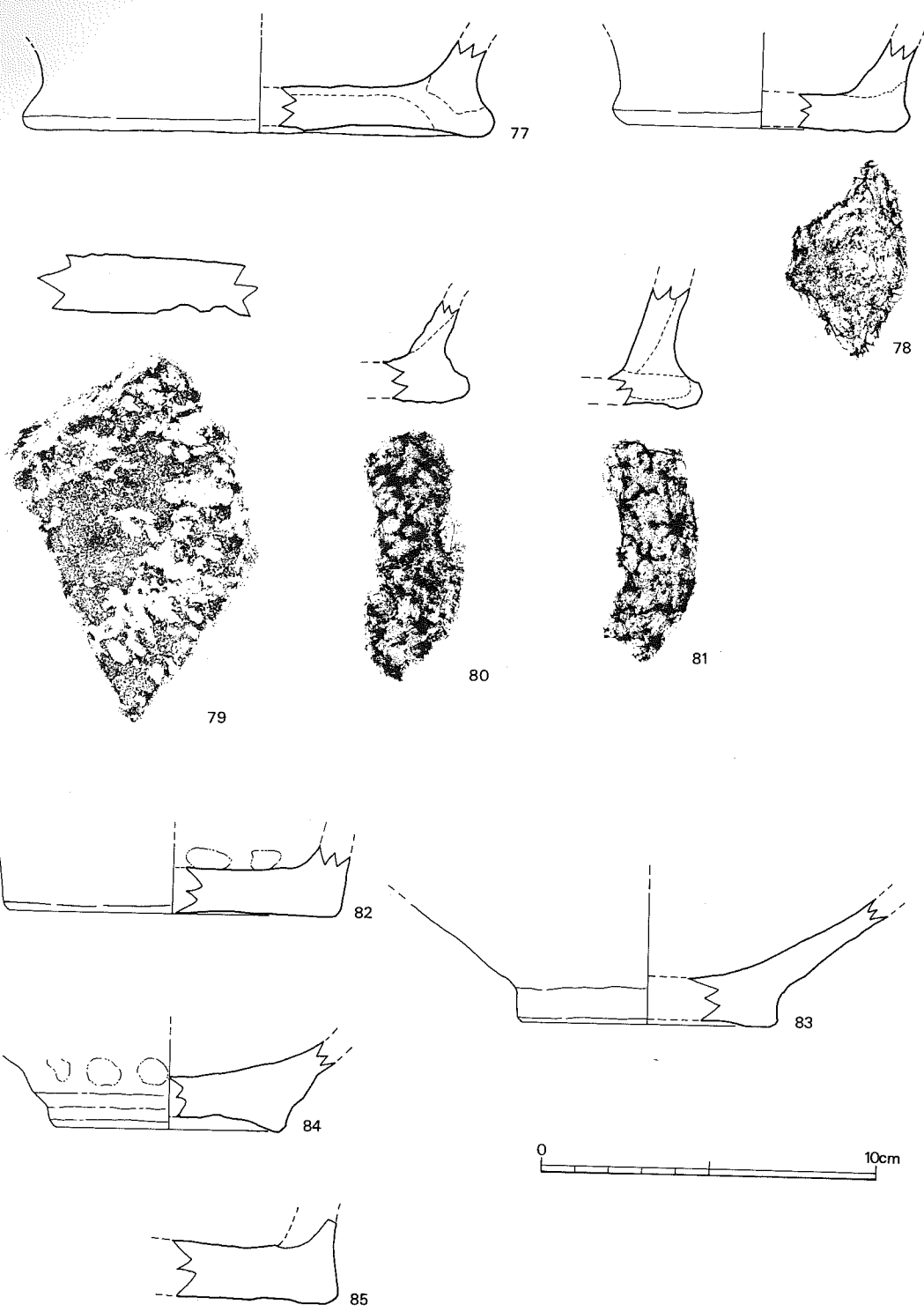
XIVb類（82～85）

後期土器の底部。82は深鉢の底部で下底面は平滑な仕上げを行なっている。内底面には指頭痕も残っている。83は底部から胴部への立ち上がりからみて、浅鉢の底部であろう。下底面は、やや上げ底気味のケズリがみられる。84は低い高台状をなす底部で三万田式土器によくみられる。85は深鉢底部。

この国崎遺跡では並木式土器から晩期粗製深鉢に至るまで、瀬戸内系や南九州系を含みながら出土している。土器からみて縄文時代中期から晩期まで続いていると思われるが、調査面積も狭く、かなり攪乱されているので層的には分けることができなかった。



第12図　縄文土器⑥（1／2）



第13図　縄文土器⑦（1／2）

表1　縄文土器観察表

単位cm　（　）は推定値

番号	調査壙 層位	器種 部位	口径 器高	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
1	C 3層	深鉢 口縁部		幾何学的な線刻文様	にぶい橙色	0.5～2.0㎜位の滑石粒子混入	普通
2	B 1層	深鉢 胴部		押引文で魚骨に似る	〃	きめの細かい胎土 滑石粒子は少量	良好
3	B 3層	深鉢 口辺部		波状の二条沈線	にぶい赤褐色	0.1～1.0㎜位の滑石粒子混入	普通
4	C 3′～4層	深鉢 口縁部		口唇部の突起部分には二列の刺突文、また胴部に向っては荒い二条沈線が施文されている	褐色	0.5㎜～3.0㎜位の石英、白色砂、赤色砂、角閃石	〃
5	不明	深鉢 口縁部		ローリングが激しい。口唇部及び口縁部に押引文。また押引文の間に凹線有り	橙色	滑石、石英混入	〃
6	〃	深鉢 口縁部		押引文を施した後、凹線を入れている 口唇部に刻目	にぶい橙色	滑石、雲母混入 きめの細かい胎土	良好
7	C 3層	深鉢 胴部		刺突文を施した後、凹線を入れている 曲線を描く	橙色	1㎜前後の粒子の大きい滑石を多く含	普通
8	C 3層	深鉢 胴部		半截竹管の押引文。 内面に指頭痕あり。征目板による調整	外：にぶい赤褐色 内：明赤褐色	滑石混入	〃
9	不明	深鉢 口縁部		ローリングがみられる。 刺突文と凹線からなる。口唇部に刻目	明赤褐色	0.5～2.0㎜位の滑石混入	やや甘い
10	C 3層	深鉢 胴部		凹線の間に刺突文を施文	にぶい橙	滑石を多く含	良好
11	C 3層	深鉢 胴部		細く、深い沈線で凹点を囲んでいる	にぶい赤褐色	角閃石、金雲母を含	〃
12	B 1層	深鉢 胴部		凹線間に円形の刺突文を持つ	〃	やや荒い胎土 滑石含	普通
13	B 3層	深鉢 口縁部		貝殻条痕有り。 口縁部に刻みが入る	にぶい褐色	滑石少量含	良好
14	A 3～4層	深鉢 口縁部		征目板調整。 口縁部に刻みが入る	外：にぶい褐色 内：明褐色	滑石多く含	〃
15	不明	深鉢 口縁部		断面が三角形になる突帯に刻目を入れている。器壁はうすく、表面は磨かれている	橙色	〃	〃
16	C 3層	深鉢 口縁部		凹線の文様で、渦巻が痕跡としてうかがえる	浅黄色	〃	〃
17	C 3′～4層	深鉢 口縁部		幾何学的な文様。 1㎝幅の深い太形凹線	橙色	滑石を多く含 石英・赤色砂若干含	〃
18	C 3層	深鉢 口縁部		平滑な仕上げで太形凹線を施す。 波状口縁になる	外：暗赤灰色 内：灰褐色	0.5～1.0㎜の滑石 石英・角閃石含	〃
19	C 3層	深鉢 胴部		縦方向に伸びる曲線的な文様	外：灰赤色 内：にぶい赤褐色	0.5～1.0㎜位の滑石・角閃石を含	わりと良好
20	C 3′～4層	深鉢 口縁部		曲線的な69型の凹線文。 口縁部に押圧文有り	明赤褐色	0.5～2.0㎜の滑石含 石英・金雲母・角閃色若干含	良好
21	B 1層	深鉢 胴部		幅6.0㎜程の凹線文で菱形の文様	橙色	0.5～2.0㎜の滑石含 1.0㎜位の石英砂含	〃
22	C 3′～4層	深鉢 胴部		浅く狭い凹線文で横位と斜位がある。 全体的に風化を受けている	外：橙色 内：にぶい橙色	0.5～3.0㎜の滑石を多く含 1㎜程の角閃石を若干含	普通
23	B 3層	深鉢 胴部		横位に曲線的な凹線文。 器壁はうすい	橙色	0.5～2.0㎜の滑石を多く含	〃
24	B 1層	深鉢 胴部		凹線文と押圧文の組み合わせ	外：橙色 内：にぶい赤褐色	0.5～2.0㎜の滑石を多く含 0.5～1.0㎜位の角閃石若干	〃

単位cm　（　）は推定値

番号	調査壙 層位	器種 部位	口径 器高	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
25	B 3層	深鉢 胴部		やや浅く、曲線的な凹線文を施す	外：明赤褐色 内：赤褐色	0.5～2㎜の滑石を多く含	普通
26	A 3～4層	深鉢 口縁部		口唇部に凹線文。口縁部に粘土突起を貼付その下は鋭い直線的な凹線文	赤褐色	石英・角閃石・白色砂含	〃
27	C 3層	深鉢 胴部		鋭い施文具によるケズリの様な凹線文。内は板目状のもので横に調整	外：明赤褐色 内：にぶい赤褐色	0.5～2.0㎜の滑石含角閃石若干含	良好
28	B 1層	深鉢 胴部		板のようなものでケズリ状の凹線文を施すが浅い	外：暗赤褐色 内：明赤褐色	0.5～2.0㎜の滑石含角閃石若干含	〃
29	D 1層	深鉢 体下半部		底部付近の胴部に、縦・横に凹線文。鋭い施文具でケズリ出すように施している	外：明赤褐色 内：赤褐色	0.5～3.0㎜の大粒の滑石を多く含	〃
30	C 3層	深鉢 口縁部		直線的な凹線文。浅い	赤褐色	石英・角閃石・白色砂含	〃
31	C 3層	深鉢 口縁部		口唇部に押圧文。口縁部に二段の連点文	橙色	0.5～1.0㎜滑石含	〃
32	C 3層	深鉢 口縁部		口縁部が肥厚。口縁より2.2㎝程下に凹線文が施されている	〃	石英・角閃石含	〃
33	C 3層	深鉢 口縁部		口縁部が肥厚。口縁が屈曲している	にぶい橙色	石英・赤色砂・金雲母含	〃
34	C 3層	深鉢 口縁部		口縁部が肥厚し、口唇部に押圧文を施す。つ字状(羽状？)の凹線文	外：橙～にぶい赤褐色 内：明赤褐色	金雲母・石英含	普通
35	C 3′～4層	深鉢 口縁部		肥厚された口縁に、斜めに凹線文。口唇部に押圧文	明赤褐色	石英・角閃石含	良好
36	C 3層	深鉢 口縁部		波状をなす、肥厚した口縁部。羽状の凹点文	〃	石英・角閃石含 ごくわずかに滑石含	〃
37	C 3′～4層	深鉢 口縁部		やや風化を受けているが、肥厚した口縁部に押圧文が施されている	外：にぶい赤褐色 内：橙色	石英・赤色砂・角閃石	普通
38	C 3層	深鉢 口縁部		細い沈線文を縦位に並列させている。沈線の断面はV字状	にぶい橙色	0.5～2.0㎜位の石英・角閃石・白色砂	良好
39	B 3層	深鉢 胴部		コーヒー豆状の連点文の下に浅い沈線が施されている	明赤褐色	0.5～2.0㎜位の結晶片岩・石英・角閃石	〃
40	C 3層	深鉢 胴部		曲線的なモチーフ。鋭い沈線	外：にぶい橙色 内：橙色	0.5～1.0㎜位の角閃石石英含。若干金雲母含	〃
41	C 3層	深鉢 胴部		全体的に風化している。曲線的な沈線文	外：灰黄褐色 内：淡黄色	0.5㎜位の石英・角閃石	やや悪い
42	B 1層	深鉢 口縁部		棒状施文具による沈線文。口縁部は肥厚	橙色	1.0㎜位の石英砂・角閃石	普通
43	B 1層	深鉢 口縁部		波状の口縁になっており、肥厚。上位に刺突と刻目状の沈線、下位は横位の条痕	外：橙～暗赤褐色 内：橙色	0.5～1.0㎜の石英・角閃石・白色砂含	良好
44	C 3′～4層	深鉢 口縁部		丸味をもつ、棒状の施文具による羽状文	外：にぶい褐色 内：にぶい橙色	0.5㎜石英砂含	〃
45	C 3層	深鉢 口縁部		丸味をもつ、棒状の施文具。短線による斜線、羽状文等が施文	にぶい橙色 器肉　黒褐色	0.5㎜石英・白色砂含角閃石・赤色砂若干含	〃
46	C 3層	深鉢 口縁部		細い棒状施文具。口辺部に羽状文	〃 〃	0.5㎜石英・赤色砂	〃
47	C 1層	深鉢 口縁部		やや肥厚した口縁部に、ヘラ施文具による羽状文を施す。多少風化を受けている	にぶい赤褐色	0.5㎜石英・白色砂含	わりと良好
48	C 3層	深鉢 胴部		粘土紐を貼りつけて刻目を施す。粘土紐より上部には、斜めに沈線を数条施す。下部はナデ	外：橙色 内：にぶい橙色	0.5㎜石英・角閃石含	普通

単位cm　（　）は推定値

番号	調査壙 層位	器種 部位	口径 器高	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
49	A 3～4層	深鉢 胴部		粘土紐を貼りつけ、刻目を施す。粘土紐より上位には斜めに沈線、下位には横位条痕	にぶい黄橙色	0.5mm位石英・白色砂含	普通
50	C 3′～4層	深鉢 口縁部		波状口縁か。棒状施文具による直線的な沈線と竹管状の刺突文	外：にぶい橙色 内：灰褐色	0.5mm位石英・角閃石・赤色砂	良好
51	C 3層	深鉢 口縁部		波状口縁の山形部分に刻目有り。 棒状施文具よる沈線と刺突文	にぶい橙色	0.5～1.0mm石英・角閃石	〃
52	C 3層	深鉢 口縁部		棒状施文具による沈線と刺突文	にぶい橙色 器肉　黒褐色	0.5～1.0mm石英・白色砂・赤色砂・角閃石	〃
53	不明	深鉢 胴部		50と同じモチーフ。沈線文と竹管状の刺突文	外：にぶい橙色 内：灰褐色	0.5mm石英・白色砂・赤色砂	〃
54	E 6層	浅鉢 口縁部		波状口縁。研磨がみられる。 磨消縄文に押圧文が施されている	にぶい褐色	0.5mm石英・角閃石・白色砂	〃
55	C 3層	浅鉢 体部		丹塗が残る縄文部分。その下位はヨコ磨多少縄文も消されている	にぶい橙色 器肉　黒褐色	0.5mm石英・角閃石	〃
56	B 1層	浅鉢 口縁部		鋭く深い沈線間に磨消縄文	淡黄色	〃	普通
57	C 3層	浅鉢？ 胴部		曲線的な沈線と疑似縄文	浅黄橙色	0.5～1.0mm石英 角閃石・赤色砂	〃
58	C 3′～4層	深鉢 胴部		縦位に沈線を施し、沈線間には磨消縄文を施す	〃	0.5mm石英・角閃石	良好
59	C 3層	浅鉢 胴部		曲線的な沈線間に磨消縄文を施す。縄文は原体を押圧したものか。精製研磨土器	外：にぶい黄褐～灰黄褐色　内：灰褐色	0.5mm～1.0mm 石英・角閃石	〃
60	B 1層	浅鉢？ 胴部		曲線的な沈線間に磨消縄文。 風化が激しい	外：にぶい黄橙色 内：黒褐色	1.0mm石英・角閃石 灰色砂	普通
61	C 3層	深鉢 口縁部		波状口縁か。横位条痕を板状のものでナデ消している。裏面口縁部に一条沈線。粗製	浅黄橙色	0.5mm石英・白色砂 角閃石	わりと良好
62	C 3層	深鉢 口縁部		横位や斜位の貝殻条痕。粗製	にぶい赤褐色	0.5～2.0mm石英・角閃石・金雲母	普通
63	E 3～3′層	深鉢 口縁部	(31.8)	粗製。⅙片　体上位で屈曲気味の体部。 横位の貝殻条痕あり	外：灰褐色 内：褐灰色	0.5～1.0mm石英・白色砂・金雲母	わりと良好
64	E 3～3′層	深鉢 口縁部	(30.4)	粗製。¼片　内わん気味の体部。 板状のもので、横・縦にナデている	外：にぶい橙色 内：にぶい黄橙色	0.5mm結晶片岩・白砂岩	〃
65	E 3～3′層	深鉢 口縁部	(36.6)	粗製。口縁部に刻目が入る。板状のものによるケズリがみられる	外：明赤褐色 内：にぶい赤褐色	0.5～1.0mm石英・白色砂・赤色砂・角閃石	〃
66	E 6層	深鉢 口縁部	(31.0)	半精製。内外面にススが付着しているところもある 直線的にすぼまる体部。板状のもので縦位に調整	灰褐色～褐灰色	0.5～3.0mm石英砂	良好
67	C 3層	深鉢 口縁部		全体を研磨している。口辺部に二重凹線	外：灰褐色 内：にぶい橙色	0.5～1.0mm石英・白色砂・赤色砂	普通
68	C 3′～4層	深鉢 胴部		沈線を横位に施している	橙色	0.5～1.0mm石英・白色砂・赤色砂・角閃石	〃
69	C 3層	浅鉢 口縁部		内面研磨、外面平滑なナデ	外：にぶい赤褐色 内：暗赤灰色	0.5～1.0mm石英・角閃石	良好
70	G 2～2′層	深鉢 口縁部		横位の条痕あり。やや風化を受けている。	外：にぶい褐色 内：橙色	0.5～1.0mm石英・白色砂・角閃石	やや悪い
71	G 2～2′層	深鉢 口縁部		全体に風化をうけもろくなっている。 横位条痕、焼成後穿孔	外：灰褐色 内：黒褐色	0.5～1.0mm石英・白色砂・赤色砂・角閃石	普通
72	不明	深鉢 口辺部		隆帯貼付後、隆帯間にヘラ状施文具を用いて荒い沈線が施されている。隆帯の付根には連点文	浅黄橙色	0.5～1.0mm石英・白色砂	良好

単位cm　（　）は推定値

番号	調査壙 層位	器種 部位	口径 器高	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
73	C 3′~4層	深鉢 胴部		縄文が施されている	にぶい褐色	0.5㎜以下の石英	良好
74	C 3層	深鉢 口縁部		山形の口縁。文様は沈線の間に半截竹管の刺突文と貝殻文が施されている	橙色	0.5~1.0㎜石英 若干赤色砂含	〃
75	C 3′~4層	深鉢 口縁部		山形の口縁か。曲線的な沈線文と貝殻腹縁による文様	明赤褐色	0.5㎜雲母・角閃石	やや悪い
76	C 3′~4層	深鉢 口縁部		山形の口縁か。口縁に刻目が入り、小さな波状をなす。沈線文と刺突文	にぶい橙色	1.0㎜程の石英砂	普通
77	B 3層	深鉢 底部		¼底片。指で横位にナデ仕上げ。 底面は鯨の脊椎骨痕をナデ消したか	外：橙色 内：にぶい橙色	0.5~1.0㎜滑石含	良好
78	B 3層	深鉢 底部		鯨の脊椎骨痕。外面は上位にケズリ状の調整。内面は、板目状の調整	にぶい赤褐色 ~にぶい橙色	1.0~3.0㎜滑石含 1.0㎜石英若干含	〃
79	C 3層	深鉢 底部		鯨の脊椎骨痕あり 内面ナデ	外：明赤褐色 内：にぶい橙色	0.5~3.0㎜滑石を多く含 1.0㎜石英・灰色砂若干含	普通
80	A 3~4層	深鉢 底部		鯨の脊椎骨痕あり 外面、指整形。内面指ナデ	にぶい橙色	0.5~2.0㎜滑石	〃
81	C 3′~4層	深鉢 底部		鯨の脊椎骨痕あり 外面、指整形、ナデ仕上げ	〃	1.0㎜滑石	良好
82	C 3層	深鉢 底部		⅓底片。底部外面は平滑な仕上げ、あまり丁寧でないナデ。内面に指頭痕あり	〃	0.5~1.0㎜石英・白色砂・角閃石	〃
83	E 1~2層	深鉢 底部		内外面ともに平滑な仕上げ。底はケズリ状でやや上底になるのか	外：にぶい橙色 内：にぶい褐色	1.0㎜石英・角閃石含 金雲母若干含	〃
84	B 1層	深鉢 底部		指整形ナデ。指頭圧痕あり。 低い高台状をなす底部	外：橙色 内：にぶい褐色	1.0㎜石英・角閃石 白色砂	やや良好
85	C 3層	深鉢 底部		平滑な仕上げ。底部はやや凸凹している	にぶい橙色 器肉　黒褐色	0.5~1.0㎜石英・角閃石・赤色砂	普通

b．弥生土器（第14図）

弥生土器は248点出土しているが小破片が殆んどで、図化できたのは8点にすぎない。

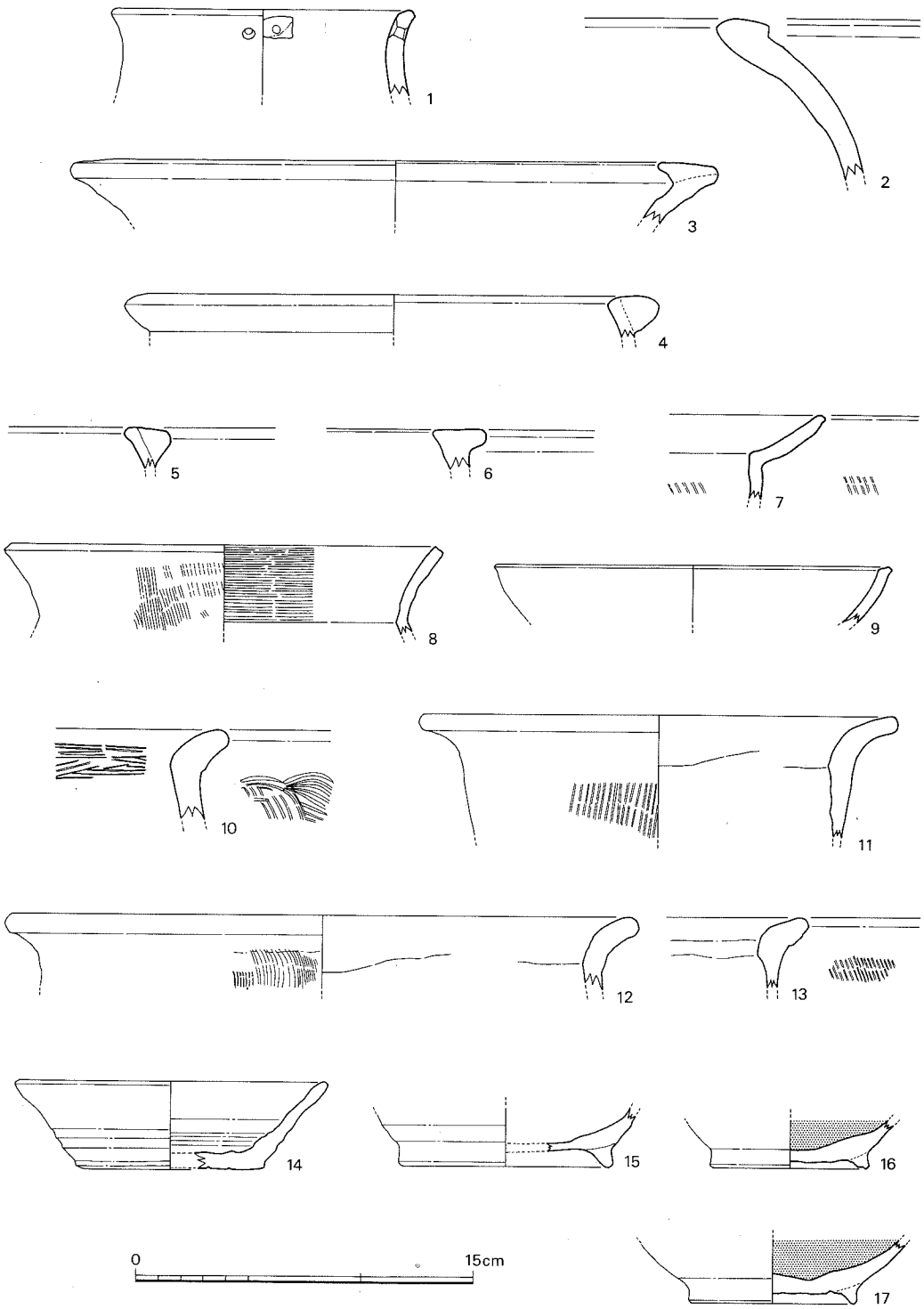
1～3は壺である。1は夜臼式系統の壺と考えられ、焼成前の穿孔が2ヶ所施されている。2はわりと大形の無頸壺で、突帯の形態から中期初頭頃と思われる。3は鋤先状口縁の広口壺で、中期前葉の段階のものであろう。

4～8は甕である。4・6は丸みをもつ断面三角形口縁で中期初頭から前葉にかけてのものと思われる。6は逆「L」字口縁をなし、中期前葉期。7は内湾ぎみに開く「く」字形口縁の台付甕で、後期後葉段階のもの。8は直線的に開く長めの「く」字形口縁の甕で、終末期のものであろう。

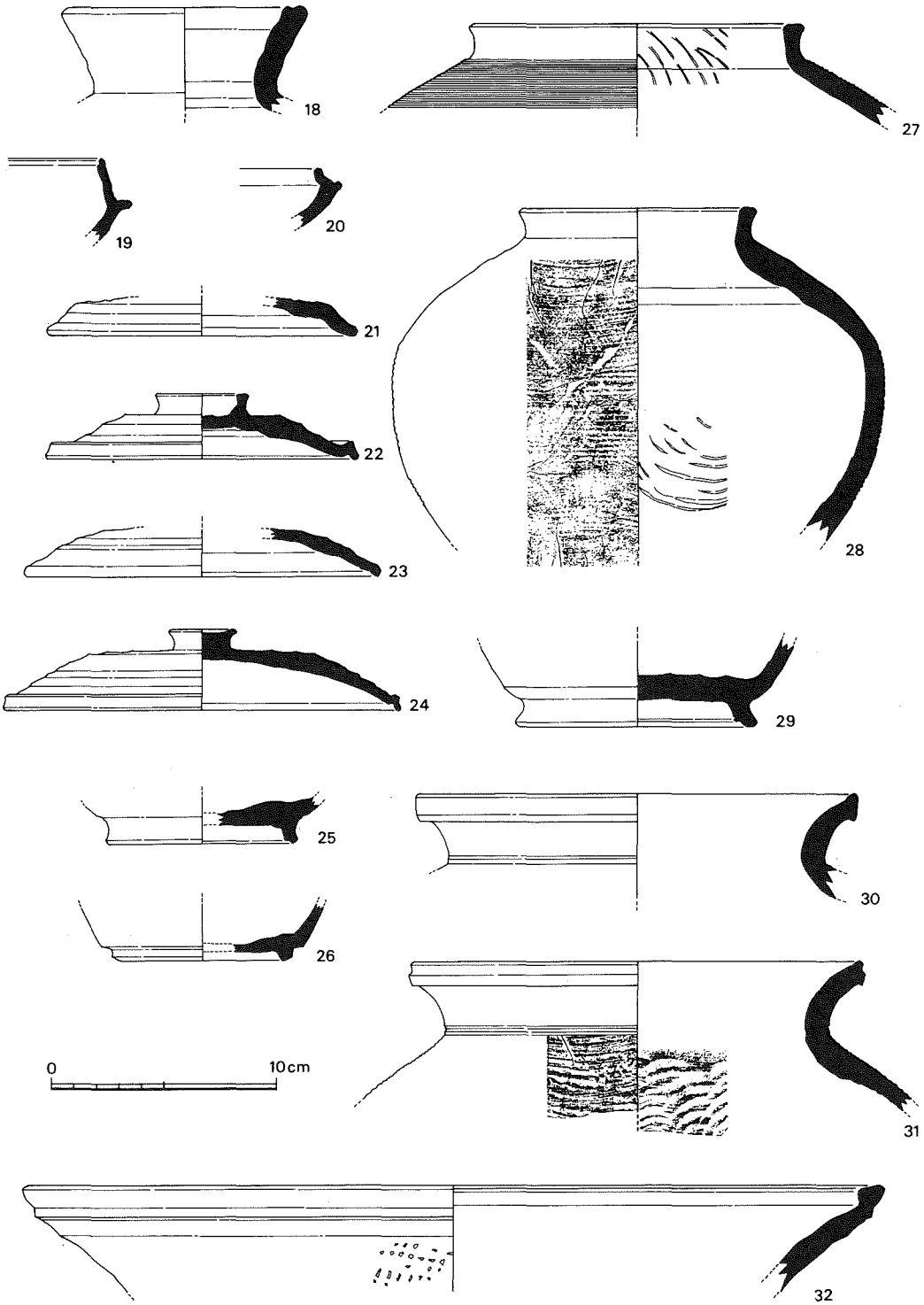
3・6・8は赤茶色っぽい色調で金雲母を含んでおり、形態的にも北九州系統と考えられる。4は肥後系統の甕の可能性が高い。7は在地系の台付甕である。

c．古墳時代の土器（第15・16図）

9は古式土師器の甕である。内湾ぎみに開き、口唇は淡い凹線状をなし、外方に小さく突出する。口縁部の形態から布留式甕と考えられ、4世紀後半代に位置づけられる。



第14図　弥生時代～歴史時代の土器①（1／3）



第15図　弥生時代～歴史時代の土器②（1／3）

19・20は須恵器杯身である。19はたちあがりが長く、口唇内面に沈線状の段がつく。陶邑編年のⅠ型式第4～5段階[註3]のもので、5世紀後半代に比定できよう。20はたちあがりの短かい杯身で比較的小形の品と思われる。ⅣB期に位置づけられ[註4]、6世紀末頃の所産であろう。

d．奈良・平安時代の土器（第14・15図）

当期の土器は、もっとも多く出土しており、4,898点の土師器・須恵器の殆んどを占める。

土師器（10～17）

10～13は甕である。張りをもたない胴部で口縁は外湾するが、10・13は短かい口縁である。

14は平底の底部から直線的に体部が開く杯身である。奈良後半期のものか。15は丹塗椀である。平安時代の10世紀代のものか。16・17は内面を燻した内黒の椀で、10～11世紀代に包括されるものであろう[註5]。また、カマド形土器が6点出土しており注目される。

須恵器（18～32）

21～24は杯蓋である。22～24は口縁端部を折り曲げ嘴状につくるもので、21は口縁端部の折り曲げが退化し消滅したものか。24は釦状のつまみ、22は輪状のつまみを有する。22はにぶい褐色を呈し、赤焼きで輪状つまみの類似例は大瀬戸町串島遺跡[註6]で出土している。22～24は8世紀前半代、21は9世紀前半代に位置づけられる[註7]。

25・26は有高台杯である。25は体部と底部との境界付近に丸みをもち、26は屈曲部に稜がはいる。25は8世紀前半、26は8世紀前半～中頃に位置づけられよう。

27～29は、薬壺形の短頸壺である。形態的に8世紀前半代のものであろう。

30～32は甕で、30・31は比較的小形で、外湾口縁端部上下に小さな突出部をもつ。32は大きく開く口縁で端部は屈曲し短かくたちあがる。いずれも奈良期の所産であろう。

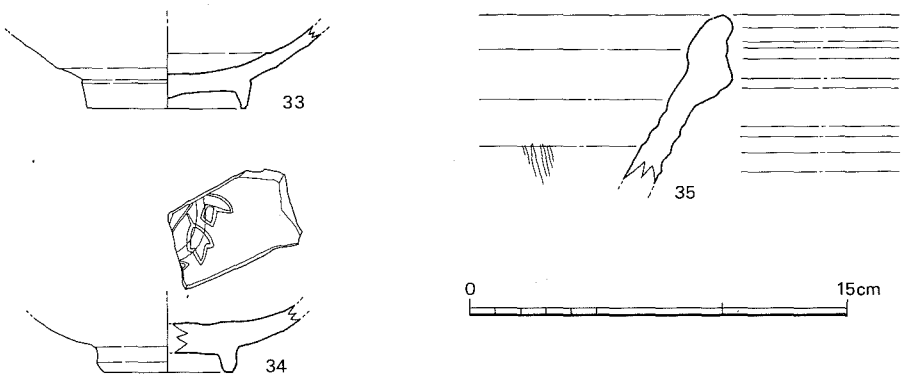
e．中世の陶磁器（第16図）

中世の土器・陶磁器として抽出できたのは11点しかない。そのうち3点を図化した。

33は白磁椀の底部片である。高台を細く削りだしており、横田賢次郎・森田勉氏分類[註8]（以下横田・森田分類とする）の椀Ⅴ類である。34は見込に花弁状のスタンプ文をもつ椀底部で、龍泉窯系青磁の14世紀後半～15世紀代のものであろう。中国産青磁は他に5点出土している。横田・森田分類の椀Ⅰ－5a類、Ⅰ－5b類と、電文帯や口縁が直口する椀（14世紀後半～15世紀代）、皿口縁部がある。また、昭和61年度にも椀Ⅰ－1類が出土している。

3は備前焼の擂鉢片である。口縁上方はややたちあがり、体部との境は外方に突出する。口縁部の形状から、間壁忠彦氏のⅣ期[註9]に相当し、15世紀代に包括される資料である。

この他に土器ではないが、滑石製石鍋破片が12点出土している。細片ばかりで図化しなかった。鍔が付くものと、昭和58年度採集資料には耳の付くタイプのものがある。



第16図　弥生時代～歴史時代の土器③（1／3）

表２　弥生時代～歴史時代土器観察表

単位cm　（　）は推定値

番号	調査壙 層位	種類 器種・部位	口径 器高	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
1	D 1～1′層	弥生土器 壺・口縁部	(13.5)	直立ぎみにのび少し外湾する口縁部。 外面平滑ナデ。内面ミガキ。焼成前の穿孔２	橙色	0.5～2㎜石英砂含む	良好
2	F 2層	無頸壺・体上部		わりと大型の無頸壺体上部片で、端部に断面三角形の突帯をもつ。全面に風化受ける	にぶい黄橙色	0.5～1㎜石英砂・角閃石含む	〃
3	C 3′層	壺・口縁部	(29.0)	鋤先状をなす中期壺口縁。全面に平滑ナデ仕上げされる	外：橙色 内：にぶい橙色	0.5～2㎜石英砂・金雲母含む	〃
4	I 1層	甕・口縁部	(23.9)	丸みをもつ断面三角形口縁の甕。 全面平滑ナデ仕上げされる	浅黄橙色	0.5～1㎜石英砂・結晶片岩粒含む	普通
5	B 1～2層	甕・口縁部		断面三角形口縁の甕。全面平滑ナデ仕上げ。 口縁下方は黒ずみ、灰黄褐色を呈する	浅黄橙色	0.5～1㎜石英砂・角閃石を含む	わりと良好
6	C 3層	甕・口縁部		逆「L」字形の口縁。口縁下方と内面に指頭圧痕を施す	橙色	1㎜石英砂多く含む 金雲母若干含む	良好
7	H 3′層	甕・口縁部		「く」字形口縁がやや内湾ぎみになる甕。 口縁ヨコナデ。胴内外面ハケをナデ消し	にぶい橙色	0.5～1㎜石英砂・角閃石を含む	普通
8	H 3′層	甕・口縁部	(19.6)	「く」字形口縁は直立ぎみにのびる。口縁内面は細かいハケ。外面はハケをナデ消し。胴内面平滑ナデ	橙色	0.5～1㎜石英砂	良好
9	I 3･3′層	土師器 甕・口縁部	(17.8)	内湾ぎみに開く布留式甕口縁部。口唇は淡い凹状をなす。全面平滑ナデ。外面スス付着	橙色	0.5㎜以下石英砂・角閃石含む	〃
10	不明 1層	甕・口縁部		短かく外湾する口縁。口縁内面と胴外面には粗いハケが残る。胴内面ヘラケズリ	にぶい橙色	0.5～2㎜石英砂・角閃石・赤色砂含む	〃
11	D 層不明	甕・口縁部	(21.4)	張りのない胴部から大きく外湾する口縁。口縁部ヨコナデ。胴部外面ハケナデ消し、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙色	1～2㎜石英砂・角閃石含む	〃
12	H 1～2層	甕・口縁部	(28.3)	短かく外湾する口縁。口縁ヨコナデ。 胴外面ハケ、内面ヘラケズリ	にぶい黄橙色	0.5～1㎜石英砂・角閃石含む	わりと良好
13	B 3層	甕・口縁部		小さく外湾する短かい口縁。口縁ヨコナデ。 胴外面ハケ、内面ヘラケズリ	にぶい黄褐色	0.5～1㎜石英砂・角閃石含む	〃
14	C 3層	杯・⅓片	(14.0) (3.9)	ヘラ切りの底部から体部直線的に開く形態の杯。体部はヨコナデ。外面は黒ずむ	橙色	1～2㎜石英砂・角閃石・赤色砂含む	良好

単位cm　（　）は推定値

番号	調査壙 層位	種類 器種・部位	口径 器高	文様・手法・特徴	色調	胎土	焼成
15	I 1層	椀・底部		丸みをもつ高台の付く椀。内面から高台外面まで丹塗。内面は研磨。他はヨコナデ仕上げ	にぶい橙色	0.5～1mm石英砂・角閃石・金雲母含む	良好
16	H 3′層	椀・底部		小さな高台が付く内黒椀。高台畳付は沈線状に凹む。外面風化受ける。内底面研磨	にぶい橙色	0.5～1mm石英砂・角閃石・赤色砂含む	わりと良好
17	C 1～2層	椀・底部		丸みをもつ体部に小さな高台が付く内黒椀。高台内がナデ仕上げされる他は研磨	橙色	1mm石英砂・赤色砂若干含む	良好
18	B 1～2′層	須恵器 平瓶・口縁部	(11.0)	逆「ハ」字形に開く口縁部。端部は沈線状の浅い凹部をもつ。全面回転ナデ	灰白色	0.5mm石英砂・角閃石含む	普通
19	D 層不明	杯身・口～体部		たちあがりが長い古手の杯身。端部内面に沈線状の段がはいる。全面回転ナデ	灰色	0.5mm以下石英砂含む	良好
20	F 2層	杯身・口～体部		たちあがりの短かい杯身。内面から受部にかけて回転ナデ	灰色	0.5～1mm石英砂含む	〃
21	F 2層	杯蓋・口縁部	(14.0)	天井部で屈曲し、口縁端部には身受けかえりや嘴状の折り曲げをもたない。回転ナデ仕上げ	灰白色	0.5mm石英砂・赤色砂含む	やや甘い
22	I 1層	杯蓋・⅛片	(14.0) (2.9)	口縁端部は嘴状に折り曲げる。輪状つまみ。天井部上半回転ヘラケズリ、他は回転ナデ	にぶい褐色	0.5～1mm石英砂若干含む	良好
23	F 2層	杯蓋・⅛片	(16.0)	嘴状に口縁端部を折り曲げる。全面回転ナデ。天井部内面はさらに静止時のナデ	灰色	0.5mm以下 石英砂含む	〃
24	G 2～2′層	杯蓋・¼片	(17.8) (3.6)	嘴状に口縁部を折り曲げ、釦状のつまみをもつ。天井部上面ケズリ、他は回転ナデ、天井部内面静止ナデ	黄灰色	0.5～3mm石英砂含む	〃
25	B 1～2′層	有高台杯・底部		少しふんばりをもつ高台の杯。全面回転ナデ調整。内底面は静止時のナデ仕上げ	暗灰黄色	0.5mm石英砂含む	良好
26	D 1～1′層	有高台杯・底部		角ばって小さい高台をもつ杯。体部は直線的にのびる	灰色	0.5mm以下石英砂含む	〃
27	B 1～2′層	短頸壺・口～体部	(25.0)	口縁から胴部内面にかけて回転ナデ。青海波文をナデ消す。胴外面カキ目調整	にぶい橙色	0.5mm石英砂含む	良好
28	G 2層	短頸壺・体上部	(10.6)	内面から胴上半まで回転ナデ。胴部はタタキをカキ目で消す。内面の青海波文はナデ	外：にぶい赤褐色 内：橙色	1～2mm石英砂含む	〃
29	G 2層	壺・底部		少しふんばりをもつ高台付の壺であろう。高台内から外面は回転ナデ。内底面は静止時のナデ消し	灰黄褐色	0.5mm石英砂・赤色砂含む	〃
30	B 1～2′層	甕・体上部	(29.8)	緩やかに外湾する口縁端部は上・下方に小さく突出する。口縁回転ナデ。胴内面指ナデ	にぶい赤褐色	0.5～1mm石英砂含む	〃
31	長方形石組 1層	甕・体上部	(20.2)	外湾する口縁端部は上・下方に突出し、外方に沈線がめぐる。胴部は格子目タタキをカキ目で消す	外：褐灰色 内：灰色	0.5～1mm石英砂・黒色砂含む	〃
32	F 層不明	甕・口縁部	(38.6)	朝顔形に開く口縁は先端で屈曲する。外方に小さな断面三角形状の突帯を有する	にぶい橙色	1mm白色砂含む	〃
33	B 1～2′層	白磁 椀・底部		外面は回転ヘラケズリ。見込に段を有する	浅黄色釉	こまかい黒色粒を含む	〃
34	D 1～1′層	青磁 椀・底部		内面に花弁状のスタンプをもつ青磁椀。高台畳付から高台内は無釉	オリーブ黄色釉		〃
35	C 1～2層	備前 擂鉢・体上部		口縁に玉縁状の肥厚をもつ擂鉢。4条以上の筋目。全面回転ナデ仕上げ	にぶい赤褐色	0.5～1mmの石英砂・白色砂含む	〃

（2）石　器（第17～24図）

この遺跡出土の石器は、剥片石器345点、礫石器73点、合計418点である。その内訳けは、剥片石器のうち、石鏃6点、石錐6点、石鋸1点、摘み形石器1点、スクレイパー28点、加工痕ある石器6点、使用痕ある剥片25点、石核2点、剥片270点である。礫石器では、礫器6点、砥石32点、石錘7点、石斧17点、磨石9点、敲石1点、凹石1点となる。特に石錐・石鋸・石錘など、漁撈具と思われる石器は、国崎遺跡の海岸遺跡としての特徴を示すものとして注目したい。なお、ここでは出土した418点より58点を選び図示した。

a．剥片石器（第17～21図）

石　鏃（1～6）

今回の発掘調査では、6点と少ない出土である。1は黒曜石製で大形である。裏面に主要剥離面を残し断面は三角形。丁寧な剥離調整を行なっており、大きさ・形から、石錐として使用された可能性も考えられる。5は剥片石鏃である。透明度のある黒曜石製。左側辺上部には、表裏に丁寧な調整がみられる。2～4は安山岩製。どれも調整は施しているが丁寧とは言えない。

石　錐（7～12）

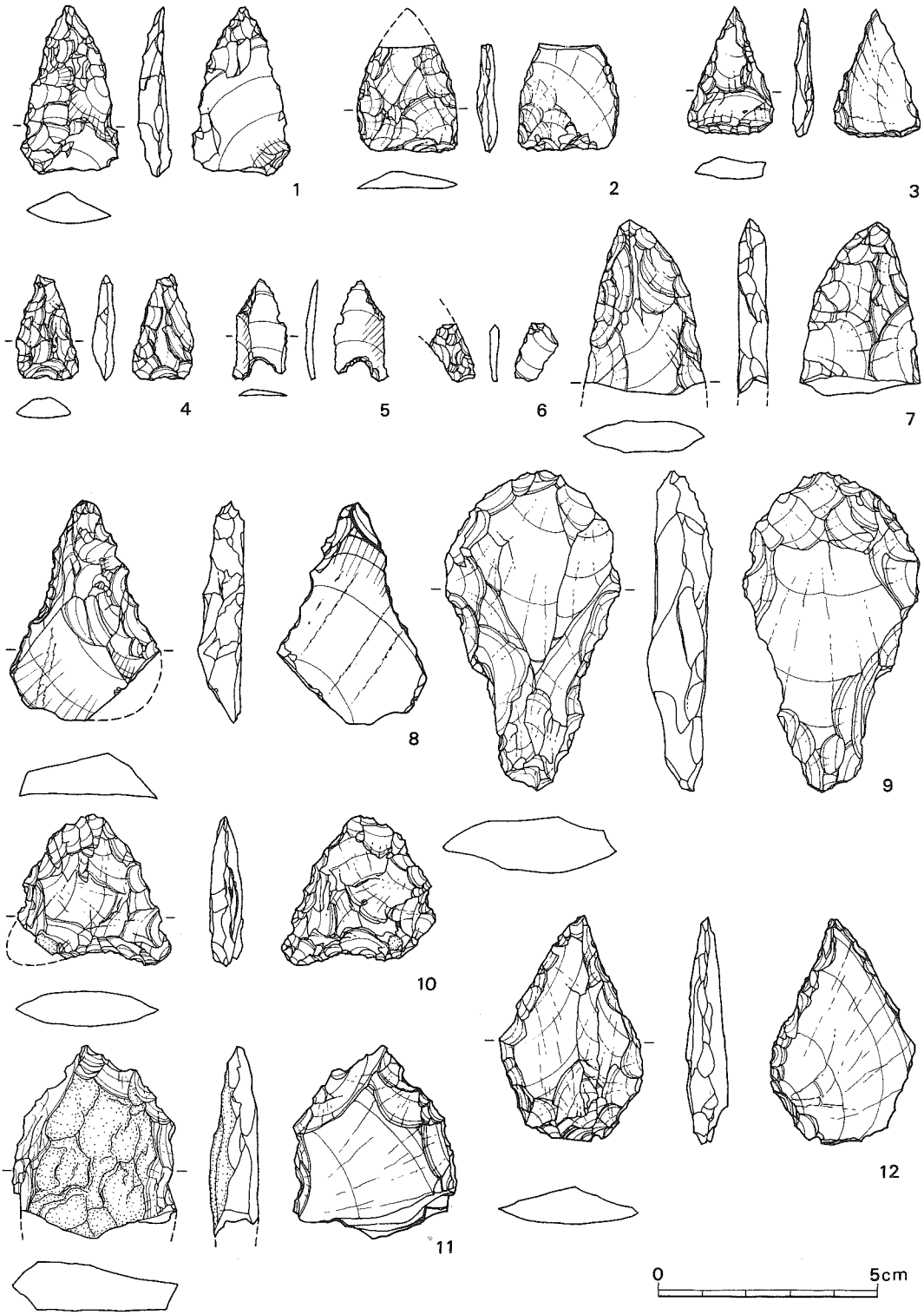
様々な形・石材がある。1は安山岩製。途中で折れている。両側縁の刃部は両面とも剥離調整を行なっている。石槍の可能性もある。8は漆黒の黒曜石製。刃部のみを加工し、裏面に主要剥離面を残す。上下が逆ということも考えられるが、鋸歯状とも思える刃部の加工から、薄くなっている下部を錐の柄に挟んだと考えた。9は安山岩製。この中では一番大きく長さ7.3cmを測る。シャモジを逆さにした様な形をしており、幅広い先端部には、表裏とも刃部加工を施している。側縁部は基部にいくに従って細くなるように調整している。10は抉りを持つもので、大形の石鏃の感もある。片脚を破損している。両面とも全面剥離調整が行なわれており、三側縁の調整も丁寧である。11は頁岩製。途中で折れている。刃部のみを両面より加工。12は安山岩製。表は大きく剥離調整を行なった後、側辺部全体に刃部加工を施している。裏は主要剥離面が残っており、打点は下にある。

石　鋸（13）

1点の出土。黒曜石製で多少風化がみられる。折れ部分の刃部とは反対の側縁部分の加工が非常に丁寧であり、急なカーブをみせている。このことより、抉りのある石錐の錐先の片脚と考えられる。また全面剥離調整を行なっており、刃部は鋸歯状に加工されている。とても丁寧に作られている。

摘み形石器（14）

1点の出土。黒曜石製。刃器状剥片を素材としており、両側縁から細かい調整を施して抉り込みをつけ、その抉り込み部分で折断したものである。裏面は主要剥離面を残し、上部には、打点もみられる。



第17図　石　器①（2／3）

スクレイパー（15～27）

15は表に自然面を残す薄手のもの。三角形の一側縁に、両面より刃部調整を行なっている。17も同様であるが、かなり厚手で刃部の対側縁は自然面である。16は黒曜石製。主要剝離面を残し、打面は自然面。片側縁には使用痕もみられるが、もう一方の側縁は刃部加工を行なっている。18は半円形の厚手の剝片を使用。両面からの調整により、円周部分が刃部になっている。表は全面剝離調整、裏は円周部のみの調整。19は大型剝片を使用。左側縁の一部を刃部加工している。20では表面に自然面を残し左側縁と下縁に刃部調整を行なっている。下縁は抉り状になっている。21は、片側縁のみを刃部調整しており、対縁は自然面。22は荒い調整のラウンド・スクレイパーで、打面と表面に自然面を残す。裏面は主要剝離面。23は三角形の一側縁を調整し刃部を作っている。断面も三角形をしている。24は角の丸い四角形で、薄い剝片を使用している。側縁部に簡単な調整を施す。背面に一部自然面を残し、打面にもなっている。25～27は同種のものと考えられる。26・27は、形・大きさ・調整までほとんど同じである。四角形の三側辺が刃部になっており、一辺は折れている。両面とも全面剝離調整を行なっている。非常に丁寧に作られている。折れ部分も、故意に折断されたものか、破損したものか検討を要する。25は26・27に比べ、小型で石材も違うが器種としては同様のものである。これらは、国崎遺跡の縄文時代の石器の中でも特異な器形をしているが、今後、用途等について十分な検討をしていかなければならない。

加工痕ある石器（28）

6点あるうちの1点である。黒曜石製で三側縁に加工痕がみられる。全面剝離調整を行なっているが、下面は自然面を残し調整はみられない。厚みはあるが、スクレイパーとしても考えられる。

使用痕ある剝片（29～33）

29は薄くなっている下縁に使用痕がみられる。31～33は黒曜石製で小さな剝片である。

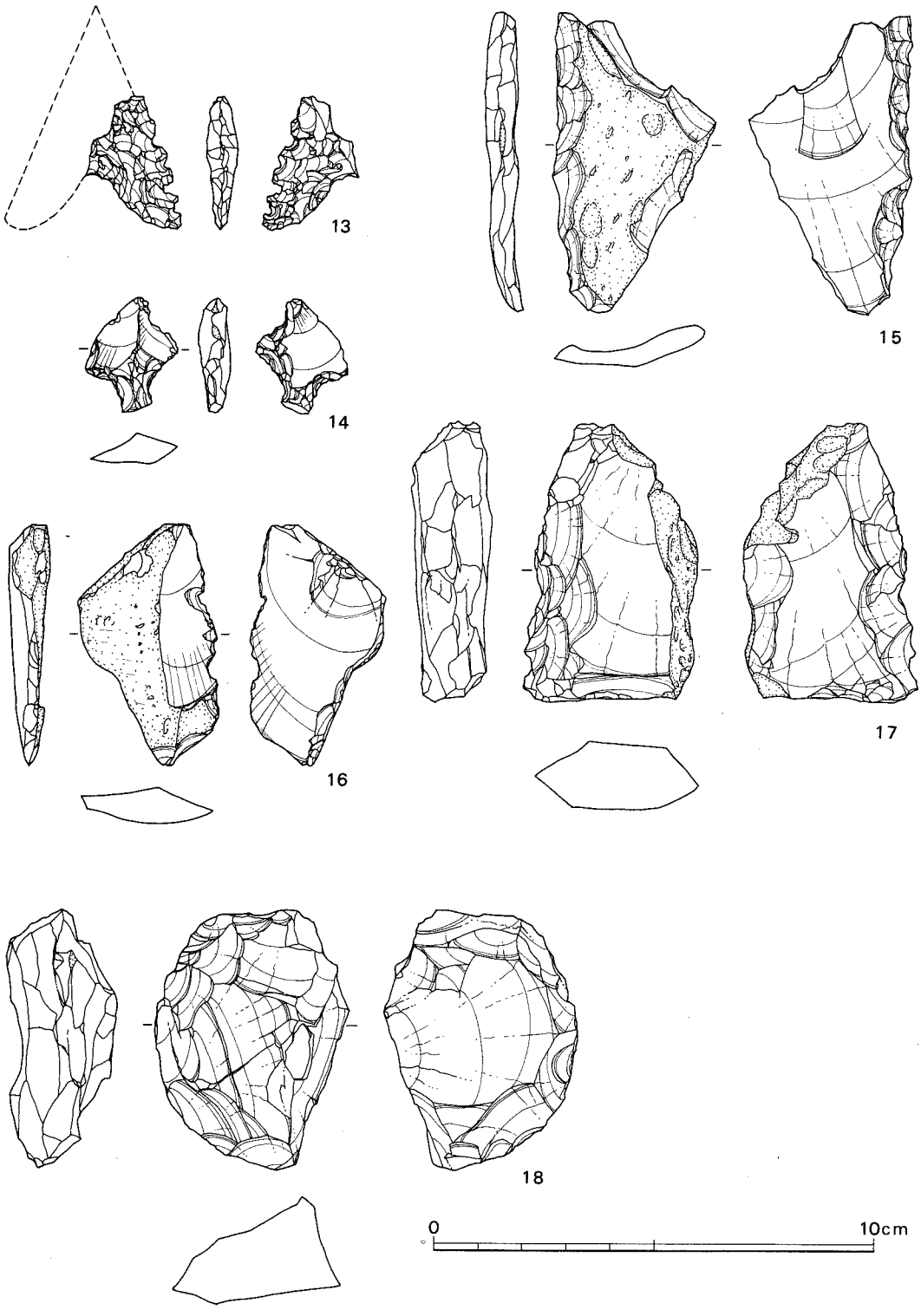
石　核（34）

2点のうちの1点を図示した。34はあまり質の良くないチャートである。

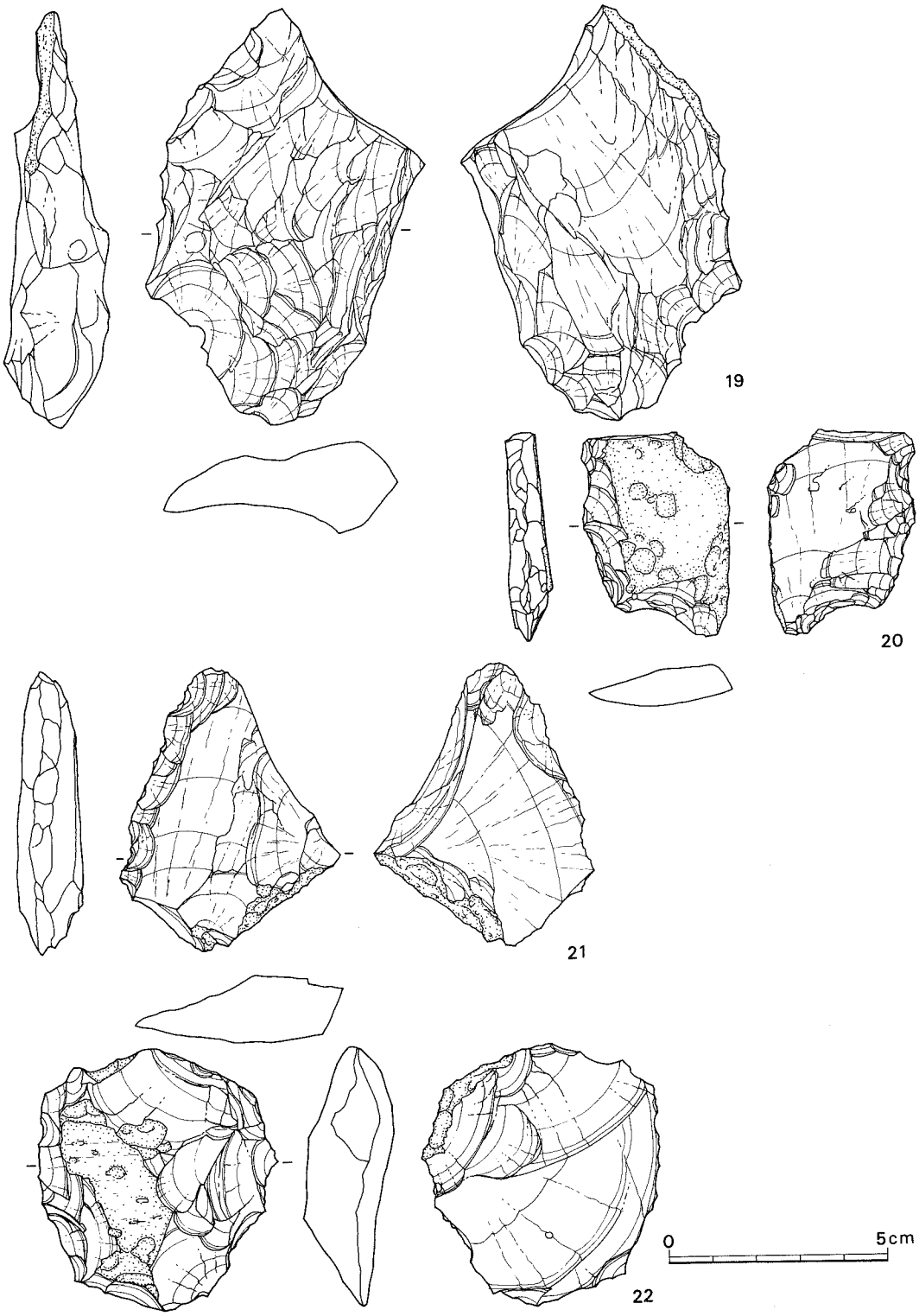
b．礫石器（第22～24図）

礫　器（35～37）

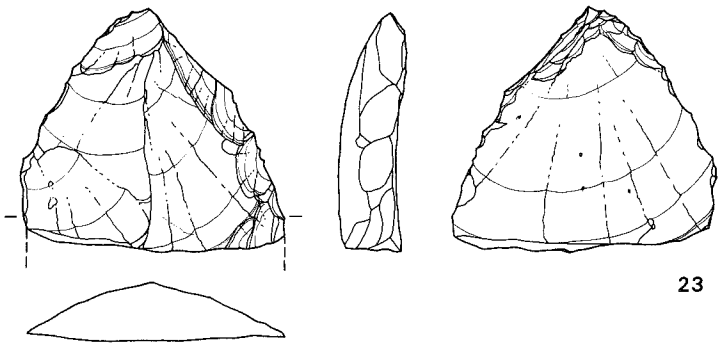
全部で6点出土しているが、海岸沿いにしては少ない感じがする。35は2ヶ所の尖頭部をもち、尖頭部分に挟まれた凹形の弯曲した刃部をもつ。扁平な礫を使用している。36は厚みのある礫を使用、両面とも一部に自然面を残しているが、ほとんどを剝離調整している。特に尖頭部と刃部にかけては丁寧である。37は尖頭状礫器。表は円礫の自然面が占め、裏は主要剝離面を残している。側縁は刃部調整を行なっているが尖頭部分は人工的なものではない。全体的に雑な作りである。残り3点も含めて全部が安山岩でできており、素材も現地でよくみられる礫を使用したものであろう。

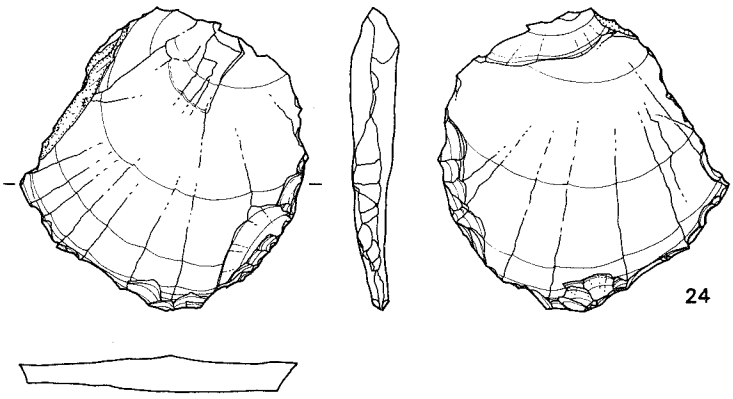


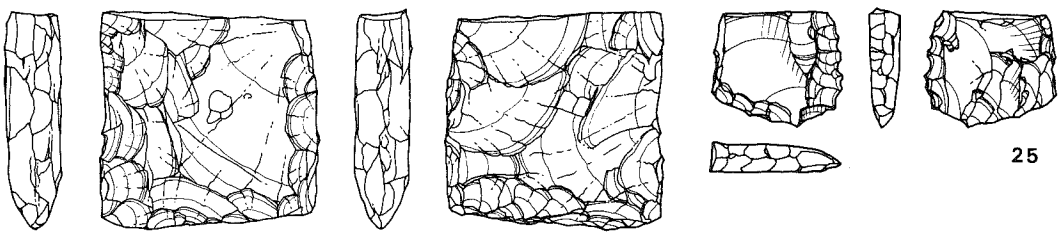
第18図　石　器②（2／3）

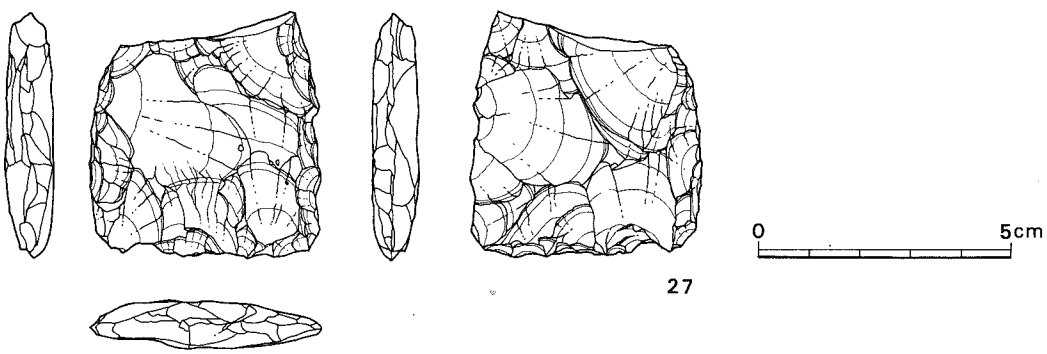


第19図　石　器③（2／3）

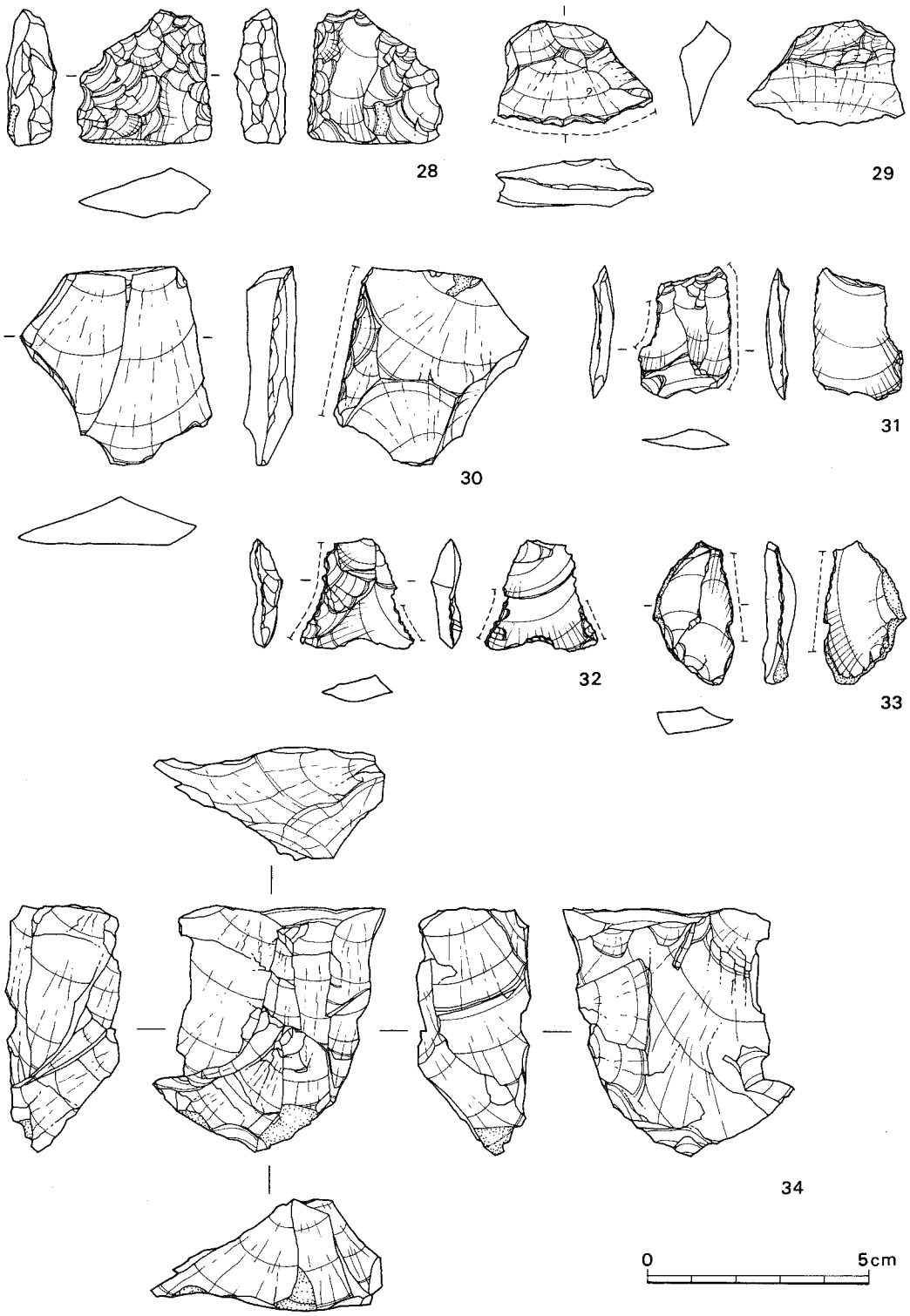








第20図　石　器④（2／3）



第21図　石　器⑤（2／3）

表3　剝片石器観察表

（単位cm・g）

番号	出土区	層	石質	器種	長	幅	厚	重量	備考
1	B	3	黒曜石	石鏃	3.8	2.2	0.7	4.1	大形
2	B	3	安山岩	〃	〈2.5〉	2.3	0.4	2.5	先端部欠損、抉りなし
3	B	1	〃	〃	2.9	1.9	0.5	2.1	抉りなし
4	B	1	〃	〃	2.4	1.4	0.4	1.3	全面剝離調整
5	C	3′～4	黒曜石	〃	2.3	1.1	0.1	0.4	剝片鏃
6	B	1	〃	〃	〈1.3〉	〈0.7〉	〈0.2〉	0.2	片脚のみ
7	B	3	安山岩	石錐	〈4.0〉	〈2.7〉	0.7	8.5	刃部は両面から丁寧に調整
8	C	3	黒曜石	〃	5.0	3.4	1.0	11.8	裏面は主要剝離面を残す
9	B	3	安山岩	〃	7.3	4.0	1.3	34.2	刃部に丁寧な剝離調整
10	B	1	〃	〃	3.4	〈3.5〉	0.8	7.8	正三角形に近く抉りあり
11	E	1～2	頁岩	〃	〈4.3〉	〈3.8〉	1.1	18.5	裏面に主要剝離面を残す
12	E	1～2	安山岩	〃	5.1	3.3	0.8	12.0	〃　打点は下部
13	B	1	黒曜石	石鋸	〈3.1〉	〈2.2〉	0.7	2.7	石鋸の鋸先を鋸歯状加工？
14	F	2	〃	摘み形石器	2.6	2.1	0.6	2.5	抉り込みの調整は丁寧
15	C	3	安山岩	スクレイパー	7.0	3.7	0.8	15.6	一側辺の刃部を両面調整
16	A	3～4	黒曜石	〃	5.5	2.2	0.8	11.5	打面は自然面
17	A	3～4	安山岩	〃	6.3	4.0	1.5	55.1	一側辺の刃部を両面調整
18	A	3～4	〃	〃	6.0	4.4	2.1	60.8	半円状の厚手の剝片を使用
19	C	3	〃	〃	9.5	6.5	2.3	90.3	大型剝片を使用
20	C	3	〃	〃	4.7	3.4	0.8	19.6	左側辺を両面より刃部調整
21	C	3	〃	〃	6.5	5.0	1.5	40.7	刃部の調整は片面のみ
22	D	1	〃	〃	6.0	5.5	1.8	56.1	ラウンド・スクレイパー
23	F	他	〃	〃	〈4.7〉	〈5.2〉	1.1	26.7	簡単な調整に留る
24	E	3～3′	〃	〃	7.0	5.7	0.7	22.6	打面は自然面、円周は刃部
25	C	3′～4	黒曜石	〃	2.3	〈2.6〉	0.6	4.4	26・27と同種と思われる
26	C	3′～4	安山岩	〃	4.3	4.3	1.1	25.6	三辺が刃部、一辺は折断面？
27	B	3	〃	〃	4.8	4.6	0.9	26.6	〃　〃
28	B	1	黒曜石	加工痕ある石器	6.1	4.5	2.0	52.2	一部に自然面が残る
29	F	2	安山岩	使用痕ある剝片	2.5	3.5	1.1	6.5	下辺片面よりの使用痕
30	C	3	安山岩	〃	4.5	4.3	1.1	4.0	一側辺に使用痕
31	C	3′～4	黒曜石	〃	3.0	2.0	0.4	2.1	両側辺に使用痕
32	C	3	〃	〃	2.5	2.5	0.6	2.3	両側辺に両面からの使用痕
33	C	3	〃	〃	3.2	1.8	0.5	2.8	側辺に自然面の打面
34	B	3	チャート	石核	5.6	5.3	2.5	63.4	打面調整あり

※〈　〉は原寸値

砥　石（38～41）

礫石器の中でも32点と最も多く44%近くを占める。ほとんどが砂岩製で、中には天草砥石と思われるものもある。38は木目細かい砂岩で薄く小型である。表は全面滑らかで、中央部は多少擦り減っている。また使用面が僅かに弯曲しており、大きさからみても手に持っての使用が考えられる。39も38と同質の赤っぽい砂岩である。表面には使用による凹凸がみられる。40はやや目の荒い砂岩である。片面のみを使用、中程で割れている。C試掘壙の出土で、この地区は16点と最も多く砥石が出土した。41は側面と表面の二面を砥石として使用。特に側面は擦り減っている。もう一面は凹みがあり、砥石を凹石に転用したか、両用したとも考えられる。

石　錘（42～48）

42～46は薄い扁平な円礫の両側に粗い打剝を加えて抉りを作る。42・46は砂岩製。47は緑色片岩製。二対の抉りがあるのは1点だけである。48はかなり風化が激しい。表裏に深い凹みがあり、両側に抉りもあることから、凹石を石錘に転用したと考えられる。

石　斧（49～53）

全部で17点の出土であるが、ほとんどが原形を留めない蛇紋岩の石片である。残りの良い5点をここに図示した。全て磨製石斧である。52のみが細粒砂岩で他は蛇紋岩製である。49は基部が破損しているが刃部の残りは非常に良い。研磨は全体に及んでいる。特に刃部は両面からの研磨で両刃を形成している。いわゆる蛤刃である。50は薄く小形の磨製石斧で完形である。剝落部分もあるが、全体的に研磨を施している。基部にいくに従って幅がやや狭くなっている。51は蛇紋岩の石斧片。52は、やや厚みがあり、基部と刃部が欠損している。剝落部分が多いが全体を研磨している。53は未製品と思われ、片面のみの研磨に終っている。

磨　石（54～56）

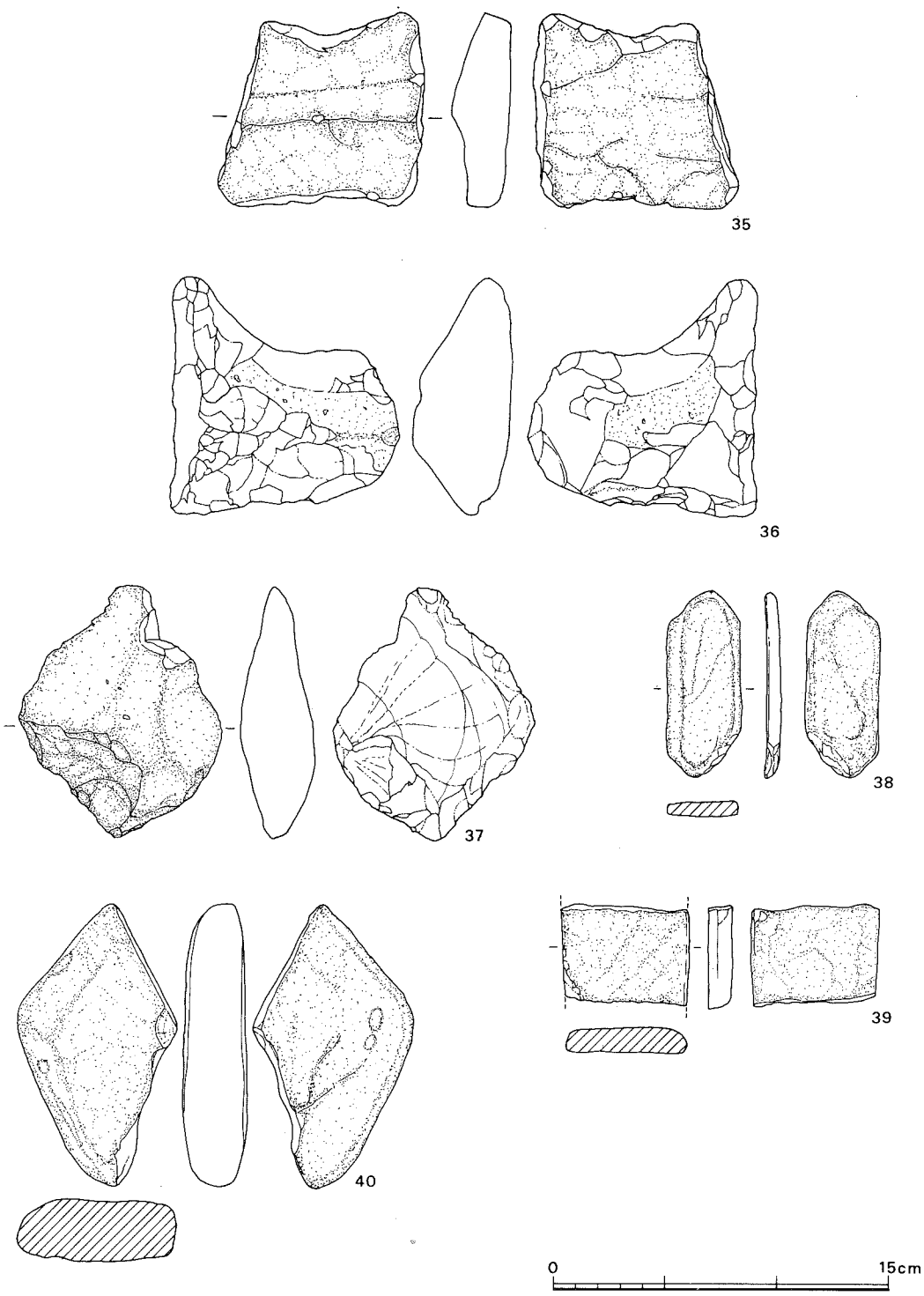
卵形の円礫を使用。3点とも両面に磨痕が認められるが、55のみは、磨痕の他に片面中央部に凹み、上下に剝落がみられ、磨石・凹石・敲石の三役に用いられたとも考えられる。

敲　石（57）

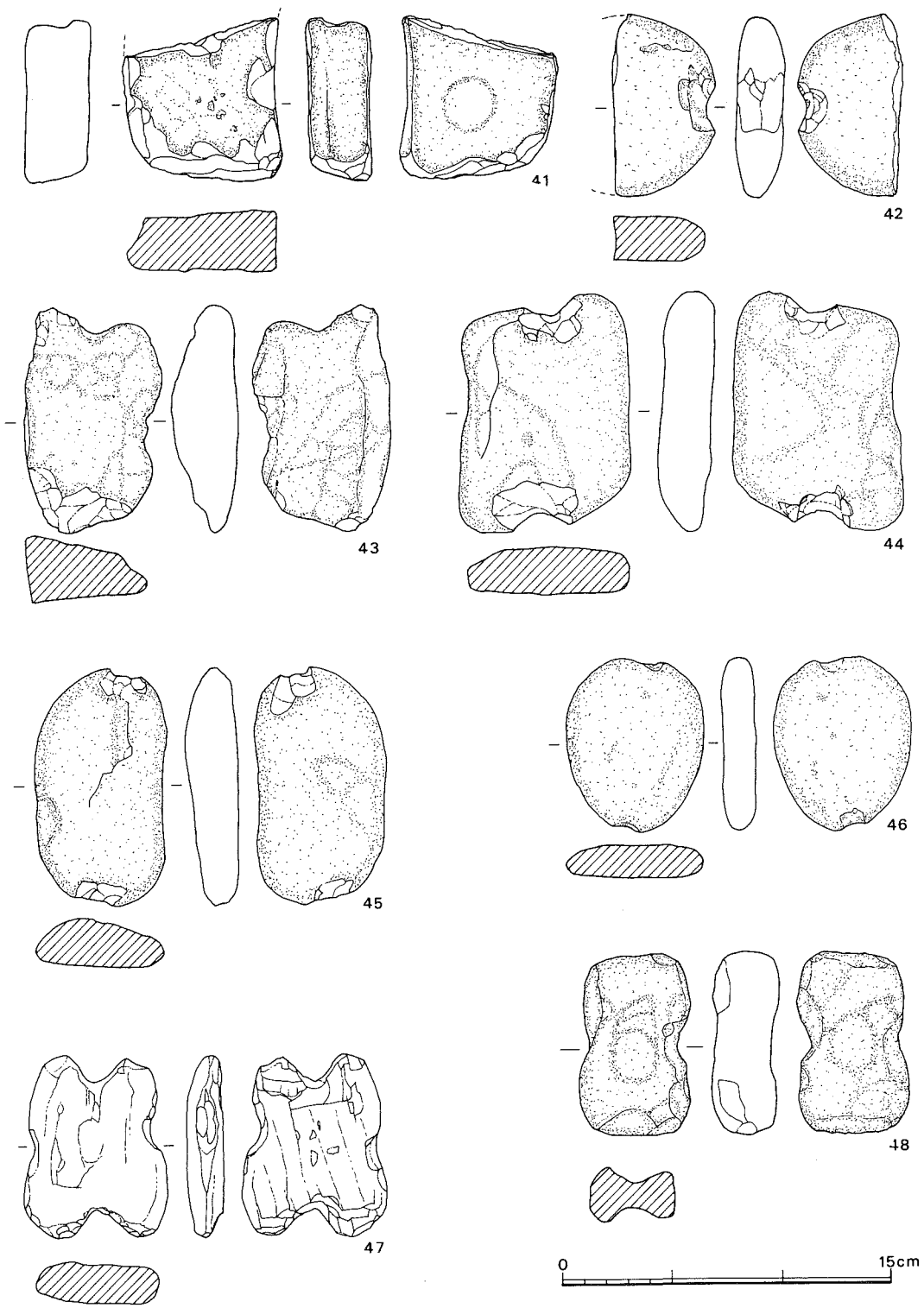
棒状の砂岩を使用。片端に敲打痕がみられる。僅か1点の出土である。

凹　石（58）

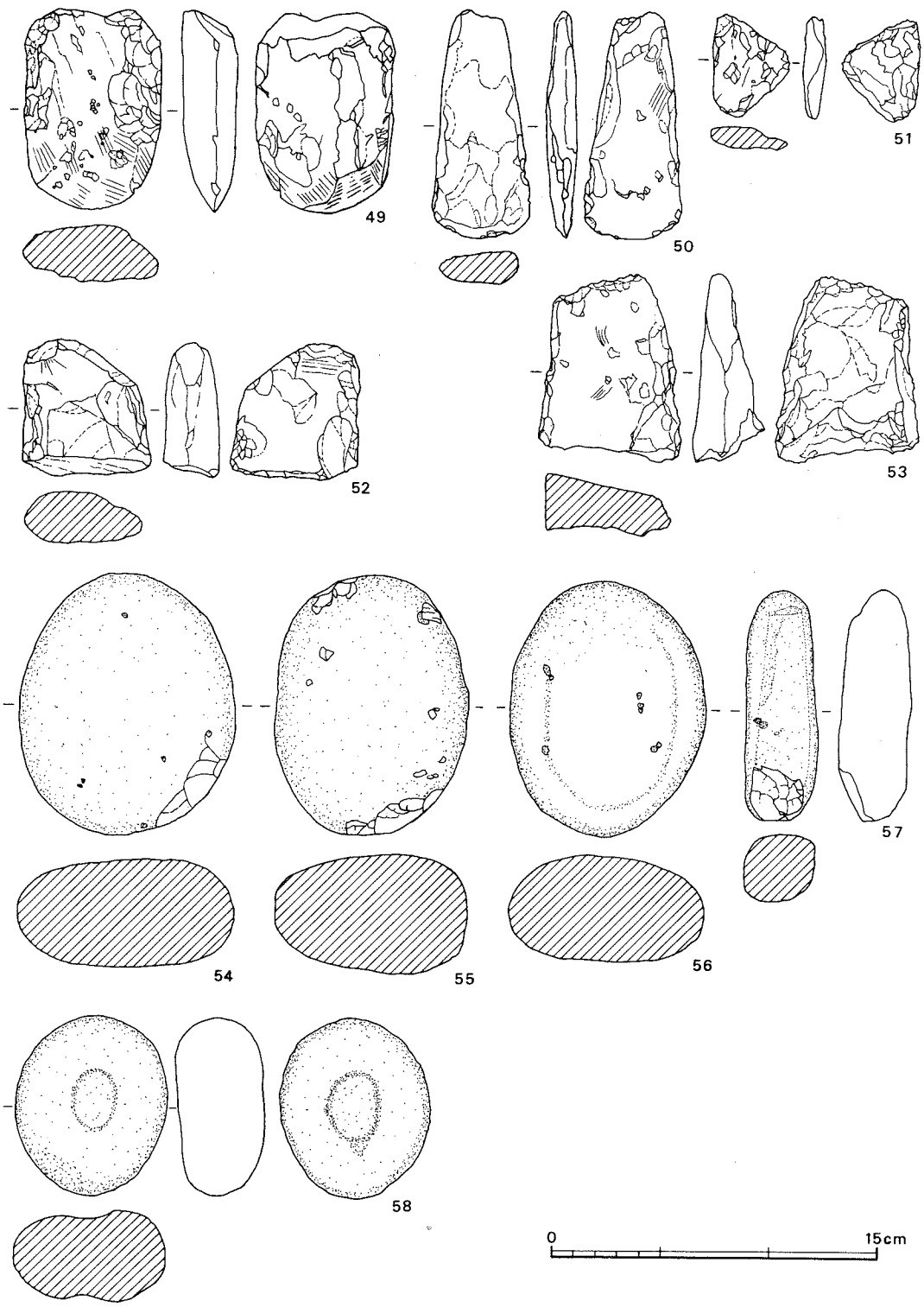
長径が8.2cmを測る小形の円礫を使用している。両面に凹みがみられる。



第22図　石　器⑥（1／3）



第23図　石　器⑦（1／3）



第24図　石　器⑧（1／3）

表4　礫石器観察表　　(単位cm・g)

番号	出土区	層	石質	器種	長	幅	厚	重量	備考
35	C	3	安山岩	礫器	9.0	9.5	2.5	274	凹形の湾曲した刃部、扁平礫
36	C	3	〃	〃	11.0	10.6	4.4	504	〃　、円礫
37	B	3	〃	〃	11.6	9.3	2.8	292	片側辺を刃部加工
38	F	1	砂岩	砥石	8.3	3.3	0.7	33	表面、両側面使用
39	C	3	〃	〃	〈4.7〉	〈5.6〉	1.1	〈53〉	両面使用、木目細かい
40	C	3	〃	〃	〈12.6〉	〈8.2〉	2.9	〈278〉	片面のみ使用、やや荒目
41	B	1	〃	〃	〈7.4〉	〈7.0〉	2.7	〈260〉	二面使用、凹石を転用？
42	C	3	砂岩	石錘	8.4	〈4.8〉	2.0	〈124〉	扁平な円礫に抉り、破損か？
43	C	3	安山岩	〃	10.4	6.3	3.0	202	上下と片側辺に抉り
44	C	3	〃	〃	11.0	7.9	2.3	336	上下に抉り
45	C	3′～4	〃	〃	10.8	6.0	2.3	213	〃
46	B	3	〃	〃	7.9	6.3	1.5	100	扁平な卵形の礫を使用
47	C	3	緑色片岩	〃	8.3	6.6	1.7	156	上下左右の側辺に抉り
48	長方形石組	1	安山岩	〃	8.4	5.2	3.0	161	凹石を石錘に転用
49	C	3	蛇紋岩	石斧	〈9.2〉	6.2	2.5	〈207〉	両刃（蛤刃）磨製
50	C	3	〃	〃	10.3	4.5	1.4	82	〃　〃　小形
51	C	3	〃	〃	〈4.6〉	〈3.6〉	〈1.0〉	〈17〉	石斧の破片、磨製
52	C	3′～4	細粒砂岩	〃	〈6.1〉	〈5.9〉	2.4	〈122〉	先端部・下部欠損、磨製
53	C	3	蛇紋岩	〃	〈8.5〉	6.5	2.6	〈178〉	片面に磨いた痕跡、未製品か
54	C	3′～4	安山岩	磨石	12.0	9.6	4.9	880	円礫使用
55	B	1	〃	〃	12.0	8.8	5.5	810	片面には浅い凹みもある
56	B	3	〃	〃	11.7	8.9	4.8	730	円礫使用
57	C	3′～4	砂岩	敲石	10.5	3.3	3.1	152	先端の一部が欠けている
58	C	3	安山岩	凹石	8.2	6.9	4.0	297	両面に凹み

※〈　〉は原寸値

（3）その他の遺物（第25図）

その他の遺物として、土錘、製塩土器、有孔円盤、円盤状土製品、硬玉製垂飾、金環がある。

土　錘（1・2）

土器片錘1点と、管状土錘がA・B・G・I試掘壙から各1点ずつ、F試掘壙から4点の計8点出土している。1は縄文中期土器口縁部破片を利用した土器片錘である。上下に切目を入れ、中央左寄りに焼成後穿孔を施し、重さ50g を量る。B試掘壙3層出土。2は管状土錘の欠損品である。手づくねつくりで、橙色を呈し、1～2mm大の石英砂を含み、焼成良好。B試掘壙1～2層出土。

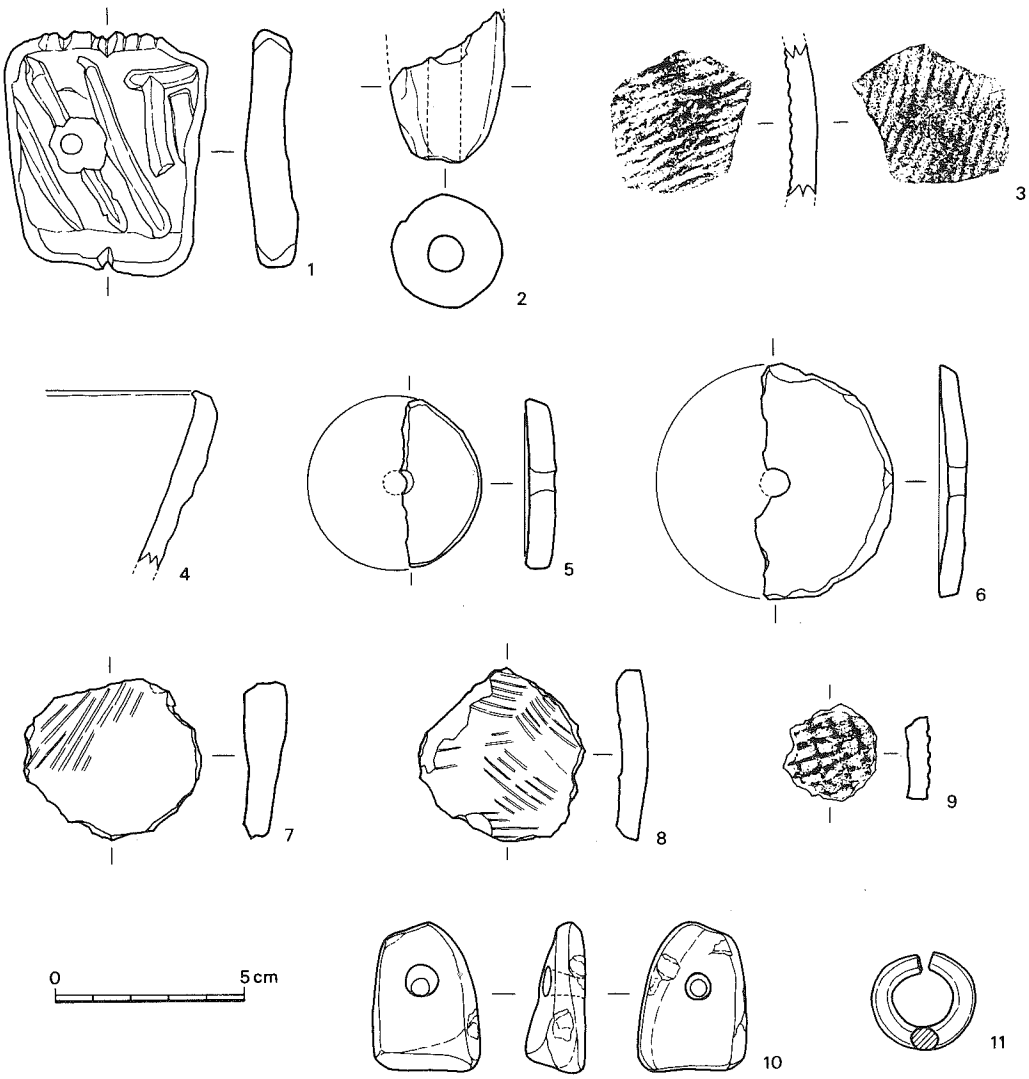
製塩土器（3・4）

出土した全ての土器片を点検したが、抽出できたのは3点である。昭和61年度分を併せても5点にすぎない。3は平行条線のタタキをもつ所謂玄界灘式製塩土器[(註10)]と呼ばれるものである。

にぶい橙色を呈し、細かい石英砂・金雲母を含み、焼成普通。昭和61年度にも１点出土している。４は手づくね状の鉢形をなし、内面には布目は見られないが、焼塩用土器といわれるものである。にぶい橙色を呈し、１～３mm大の石英砂を含み、焼成良好である。同様の形態で内面に布目が付くものはG試掘壙２層から１点出土しており、昭和61年度にも１点出土している。

有孔円盤（５・６）

縄文中期土器片を利用した有孔円盤が２点あり、両者とも半欠品である。５は復原径4.6cm厚さ0.7cm、復原孔径0.6cmを測る。周縁は丁寧に研磨し丸く仕上げる。C試掘壙３層出土。６は復原口径6.3cm、厚さ0.5cm、復原孔径0.8cmを測る。周縁はやや粗いつくりである。B試掘壙３層出土。



第25図　その他の遺物（1／2）

円盤状土製品（7～9）

7は弥生土器甕、8は土師器甕、9は須恵器甕あるいは壺の、いずれも胴部破片を利用した円盤状製品である。7は径4.7cm×4.3cm、厚さ1.2cm、重さ19.8g を測る。F試掘壙2層出土。8は径4.6cm×4.4cm、厚さ0.7cm、重さ14.8g を測る。F試掘壙2層出土。9は径 2.5cm×2.4cm、厚さ0.6cm、重さ4.6g を測る。表採資料。

硬玉製垂飾（10）

C試掘壙3′層の人骨頭部付近から出土した垂飾である。平べったい分銅形をなし、下部½ほどが鮮やかな翠色をなし、上部は白濁色を呈する。長さ3.9cm、幅2.8cm、重さ28.4g を測る。

金　環（11）

H試掘壙3′層から出土した金環である。この層は自然攪乱を受けており、また古墳の遺構は確認されていない。銅心金箔であり、金は殆んど剝落している。長さ2.7cm×2.0cm、厚さ0.7cm、重さ14.5g を測る。

籾痕付着土器（図版2）

籾痕が付着した土器が2点ある。土師器甕と須恵器杯蓋の外面に見られる。土師器はC試掘壙3層、須恵器はF試掘壙1層から出土している。

註1　田中良之「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢、第6集』　九州古文化研究会　1979

2　前川威洋『九州縄文文化の研究』　前川威洋遺稿集刊行会　1979

3　中村浩「和泉陶邑窯出土遺物の時期編年」『陶邑Ⅲ』　大阪府文化財調査報告書第30輯　大阪府教育委員会　1978

4　川述昭人「狐塚古墳群出土の須恵器について」『狐塚古墳群Ⅱ』　大任町文化財調査報告書第2集　大任町教育委員会　1978

5　土師器の年代については以下の文献を参考にした。
横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の土師器に関する覚え書き」『九州歴史資料館研究論集2』
九州歴史資料館　1976
山本信夫「大宰府における古代末から中世の土器・陶磁器」『中近世土器の基礎研究Ⅳ』
日本中世土器研究会　1988

6　高野晋司・宮崎貴夫他『串島遺跡』　長崎県文化財調査報告書第51集　長崎県教育委員会　1980

7　須恵器の年代については以下の文献を参考にした。
田崎博之「干潟遺跡出土土器の編年」『干潟遺跡』　福岡県文化財調査報告書第59集
福岡県教育委員会　1980
佐藤浩司「奈良時代の須恵器と土師器」『東アジアの考古学と歴史下』　岡崎敬先生退官記念論集
同朋舎　1987

8　横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』
九州歴史資料館　1978

9　間壁忠彦「備前」『世界陶磁全集3　日本中世』　小学館　1977

10　横山浩一「玄界灘式製塩土器(上)」『九州文化史研究所紀要第二十九号』　九州大学九州文化史研究施設　1984

Ⅲ 総　　括

この項では、縄文時代と奈良・平安期の様相について総括を行う予定でいたが、紙数がつきてしまった。したがって、ここでは簡単なまとめを行っておきたい。

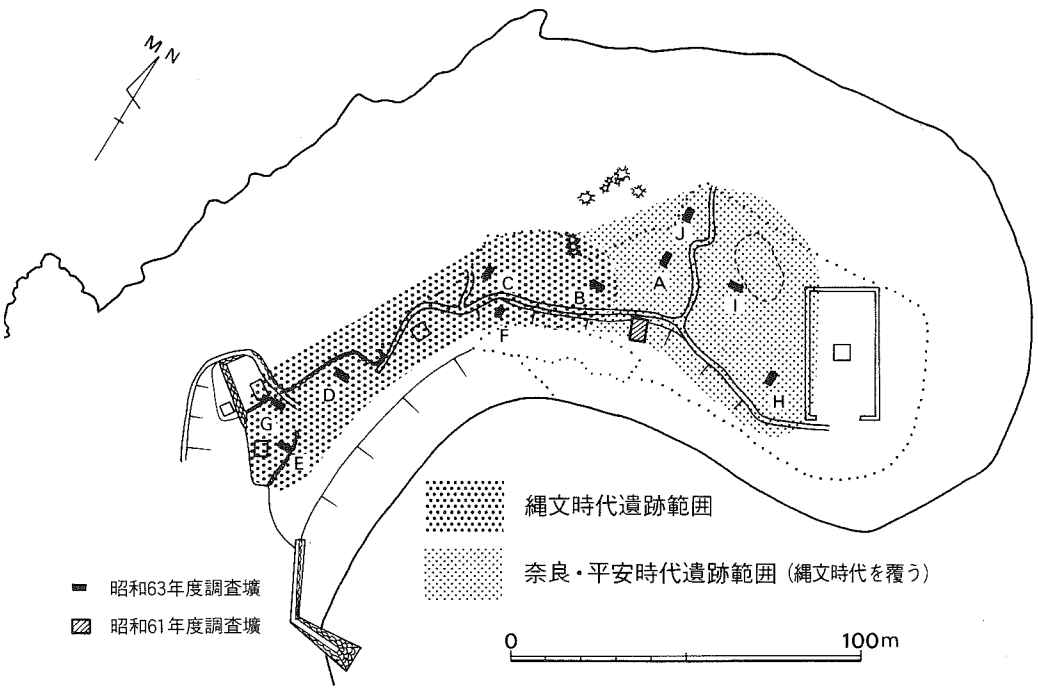
①今回の範囲確認調査によって、縄文時代中・後期の包含層が砂礫丘西南部地域に、また奈良・平安時代の遺物は、縄文期の範囲を覆って住吉神社付近まで及ぶことが確認された。

②縄文時代の遺跡は、立地・遺物の内容から漁撈に比重をおいた集落であったと考えられる。

③奈良・平安期の遺跡の成立基盤については、遺物の内容からみると、漁撈遺物は少量しか出土しておらず、単なる自然発生的な漁村であることは考えがたい。この点で注目されるのは平安期の肥最埼警固所の存在である。野母半島(註1)（脇岬）と口之津(註2)に比定する説があるが、この両者に近く、国崎半島から展望すれば南西海上一帯を見渡すことができ、本土決戦に備えてボートによる決死隊が駐屯したというのも暗示的である。したがって、立地的にも対外的な防御も兼ねた要所的な基地ではなかったかと推測されてくるが、別の機会に再検討したいと思う。

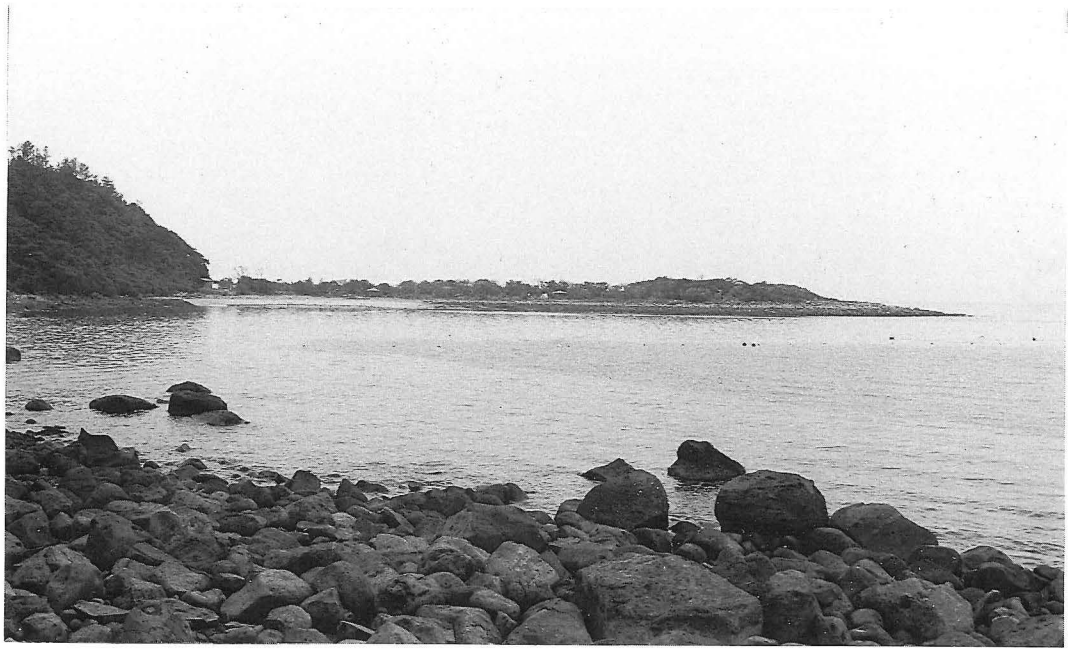
註1　満井録郎「野母崎町域の古代から中世」『野母崎町郷土誌』　1973　他

2　木下良「肥前国」『古代日本の交通路Ⅳ』　大明堂　1979



第26図　遺跡の範囲

図　　版



遺跡遠景（南東から）

遺跡近景（東から）

図版 2

硬玉製垂飾と金環

籾痕付着土器（1／1）

Ⅳ　自然科学分析の成果

１．長崎県南串山町国崎遺跡出土の縄文時代人骨

長崎大学医学部解剖学第二教室　　分部哲秋・松下孝幸・佐伯和信

２．長崎県国崎遺跡の貝類から見た考察

長崎県立北高等学校教諭　　山本愛三（日本貝類学会評議員）

長崎県南串山町国崎遺跡出土の縄文時代人骨

分部哲秋*・松下孝幸*・佐伯和信*

〔キーワード〕：長崎県南串山町、縄文時代中・後期人骨、攪乱骨、未成人

はじめに

長崎県南高来郡南串山町京泊名丙１に所在する国崎遺跡の遺跡範囲確認調査が、1988年（昭和63年）９月19日から30日までに行なわれた結果、硬玉製の垂飾とともに人骨が発掘された。この人骨は縄文時代人骨と考えられており、頭蓋、四肢骨の一部、椎骨片などが残存していたが、いずれにしても人骨の量はかなり少ない。しかし、残存していた骨の種類からすれば、本来は埋葬状態であった可能性が強く、二次的に攪乱を受けたようである。

九州では縄文時代人骨は本州に比較すればその出土例はかなり少なく、縄文人の研究はまだ遅れている。このような意味からも縄文時代人骨は貴重である。本例は残存量も少なく、保存状態も良くないが、年令などを推測することができたので、その結果を報告しておきたい。

資料

本遺跡から出土した人骨を解剖学的に精査した結果、人骨は１体分で、下記の所見より、14～18才の小児（Ⅱ期）から成年と推定される。性別は一応不明としておきたい。

本人骨は、別稿で述べられているように、考古学的所見より、縄文時代の中・後期に属する人骨と考えられている。

所見

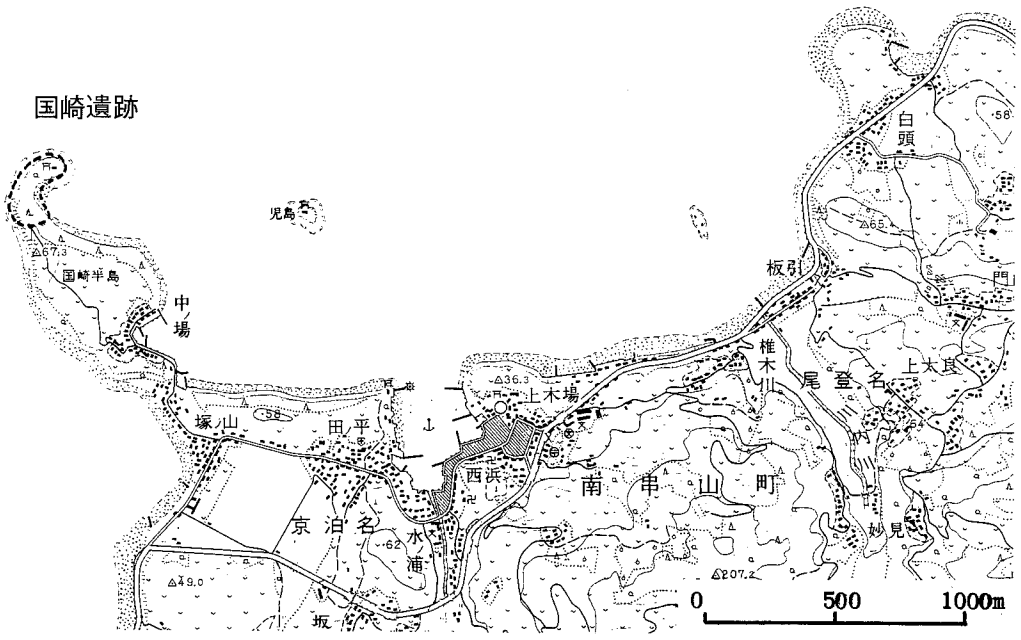
各人骨の残存部は図２に示すとおりである。また、計測はまったく不可能であった。

１．頭蓋

後頭半が残存していた。骨壁はやや薄い。外後頭隆起の発達はみられない。また、上項線も認められず、乳様突起も小さい。外耳道は左側の観察ができたが、骨腫は認められない。縫合は、ラムダ縫合、冠状縫合の右側部および矢状縫合の前方部の観察が可能で、これらはいずれも内外両板は開離している。

計測はできないが、観察したところではまだ未成人らしい特徴がうかがえる。

＊ Tetsuaki WAKEBE, Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI
Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University
〔長崎大学医学部解剖学第二教室（主任・内藤芳篤教授）〕



第1図　遺跡の位置 (Fig. 1. Location of Kunisaki site, Nagasaki Prefeture)

2．歯

遊離歯が1本残存していた。また、上顎骨の右側の一部が残存しており、歯槽の観察も可能である。この残存歯と歯槽の状態を歯式で示すと、次のとおりである。

／／／○●○○／｜／／／／P_2／／／

（／：不明（破損）　○：歯槽開存　●：歯槽閉鎖）

咬耗度はBrocaの1度で、P_2の歯根は完成している。なお、上顎右側の第一小臼歯に相当する歯槽は閉鎖している。年令が若く、歯槽も健全であることから、これは抜去された可能性が強い。

3．四肢骨

四肢骨は上腕骨が残存していた。

①上腕骨

左側が残存していた。

近位部は骨端と骨体がまだ分離している。骨体の径は著しく細い。

4．軀幹骨

椎骨片、肋骨片が少量残存していた。

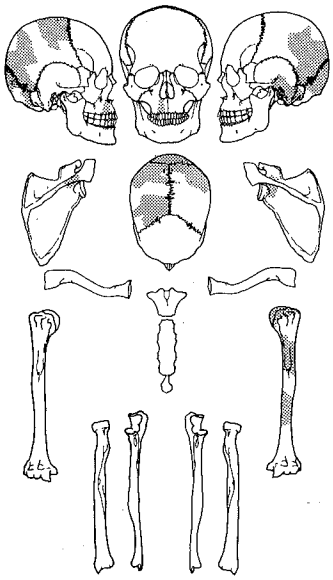
5．性別・年令

①化　骨

化骨の進行状態が観察可能であったのは、上腕骨の近位端のみである。この部は骨頭が骨端軟骨で分離しており、未癒合である。

②年令の推定

現代人における上顎第2小臼歯の歯根の完成時期は、金田（1957）によれば14才であることから、歯からの推定年令は14才以上である。また現代人の上腕骨頭の骨癒合年令は、男性で19～20才、女性で18～19才であり、化骨からは18才以下と考えられる。したがって、この人骨の年令は、14～18才の小児（Ⅱ期）から成年と推定される。性別は不明である。



第2図　人骨の残存部、アミかけ部分（Fig. 2. Regions of preservation of the skeleton. Shaded areas are preserved.）

要　　約

長崎県南高来郡南串山町京泊名丙１に所在する国崎遺跡の遺跡範囲確認調査が、1988年（昭和63年）に行なわれ、人骨が出土した。その所見は、次のように要約することができる。

１．この人骨は１体分で、縄文時代の中・後期に属する人骨である。

２．この人骨の年令は、14～18才の小児（Ⅱ期）から成年と推定されるが、性別は不明である。

３．残存量は少なく、頭型や顔面頭蓋などの特徴などは不明であるが、風習的抜歯を思わせる痕跡が認められる（上顎の右側P_1）。

４．上腕骨体は著しく細い。

５．本例は貴重な縄文時代人骨であったが、残存量は少なく、また、未成人であったため、国崎縄文人の特徴を明らかにすることはできなかった。

《擱筆するにあたり、本研究と発表の機会を与えていただいた南串山町教育委員会と長崎県教育庁文化課の諸先生方に感謝します。》

参考文献

1．金関丈夫、原田忠昭、浅川清隆、1955：熊本県下益城郡豊田村御領貝塚発掘の人骨について。人類学研究、2：93－163.

2．金田義夫、1957：日本人の永久歯における歯根完成時期の研究。歯科月報、30：165—172.

3．清野謙次、1969：肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚。日本貝塚の研究、岩波書店：1－9.

4．松野　茂、地後井泰然弘、永田忠寿、1967：肥後国上益城郡嘉島村六嘉かきわら貝塚出土人骨について。熊本医学会雑誌、41：41－52.

5．松下孝幸、他、1980：串島遺跡出土の人骨。串島遺跡（長崎県文化財調査報告書51）：133－135.

6．松下孝幸、他、1980：五島・白浜貝塚出土の縄文晩期人骨。白浜貝塚（福江市文化財調査報告書2）：120－133.

7．松下孝幸、1981：宮の本遺跡出土の人骨。宮の本遺跡（佐世保市埋蔵文化財調査報告書）：93－109、114－118、145－146.

8．松下孝幸、他、1983：佐賀県唐津市菜畑遺跡出土の人骨。菜畑遺跡（唐津市文化財調査報告5）：388－398.

9．松下孝幸、1984：鹿児島県知名町（沖永良部島）中甫洞穴出土の人骨。中甫洞穴（鹿児島県知名町埋蔵文化財発掘調査報告書）：33－58.

10．松下孝幸、他、1986：熊本県小川町七ツ江カキワラ貝塚出土の縄文時代人骨。七ツ江カキワラ貝塚・竹の下貝塚（熊本県文化財調査報告書第79集）：39－70.

11．内藤芳篤、1973：沖の原遺跡の人骨。長崎大学解剖学第二教室.

12．岡本辰之輔、1929：肥後国下益城郡阿高貝塚人人骨の人類学的研究（頭蓋骨に就いて）第一報。人類学雑誌、44（第一附録）：1－26.

13．岡本辰之輔、1929：肥後国下益城郡阿高村西阿高貝塚人人骨の人類学的研究（基の二、四肢骨について）。人類学雑誌、44（第三附録）：77—105.

14．大森浅吉、1960：故南山大学教授中山英司博士により測定された阿高貝塚人骨の測定値。人類学研究、7（附録）：211－230.

15．鈴木文太郎、1918：肥後轟貝塚河内道明寺にて発掘せる人骨に就いて。人類学雑誌。33：59—66.

Human Skeletal Remains Excavated from Kunisaki Site, Minamikushiyama-Cho, Nagasaki Prefecture.

Tetsuaki WAKEBE, Takayuki MATSUSHITA, Kazunobu SAIKI

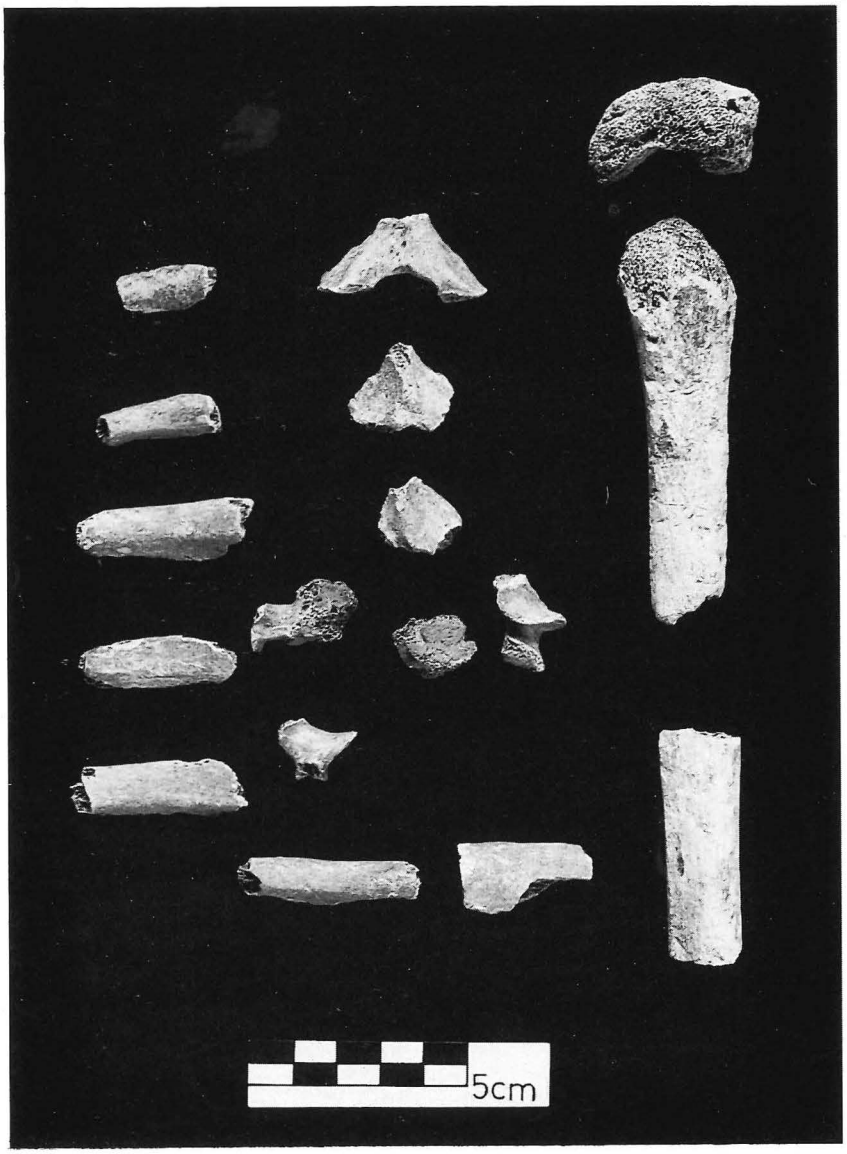
〔Department of Anatomy, Faculty of Medicine, Nagasaki University〕

A human skeletal remain of the middle and late phase of the Jomon period was excavated from Kunisaki Site, Minamikushiyama-Cho, Minami-Takagi-gun, Nagasaki Prefecture, in 1988.

This skeleton is in bad preservation, thus can not be observed and measured. But it can be estimated to be juvenile (14～18 years old) with the tooth extraction.

国崎縄文時代人骨・頭蓋（小児Ⅱ期）
(Kunisaki Jomon skull, juvenile)

国崎縄文時代人骨・頭蓋（小児Ⅱ期）
(Kunisaki Jomon skull, juvenile)



国崎縄文時代人骨・四肢骨・躯幹骨（小児Ⅱ期）
(Kunisaki Jomon postcranial skeletons, juvenile)

長崎県国崎遺跡の貝類から見た考察

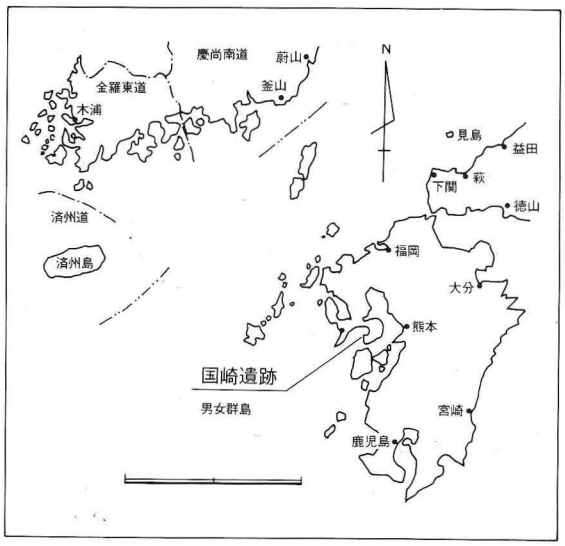
山　本　愛　三

1．序

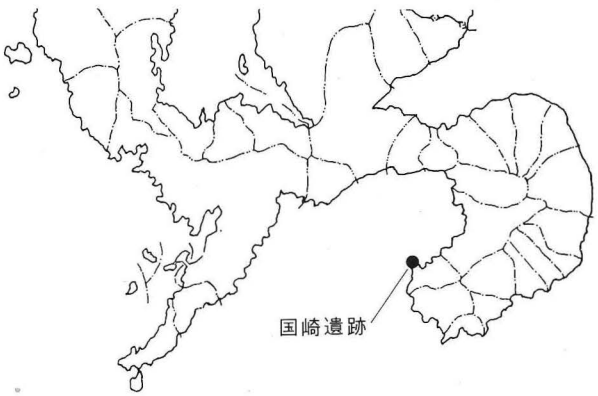
昭和63年９月19日から９月30日の間、本遺跡の発掘調査が行なわれた。その折の資料の分析の依頼を受けた。この機会を与えて下さった、長崎県教育庁文化課文化財保護主事、宮崎貴夫氏を始め、長崎県南高来郡南串山町教育委員会等関係諸氏に深甚の謝意を表わすものである。

2．本遺跡の概況

本遺跡は第１図、第２図に示すように、長崎県南高来郡南串山町丙１にあり、島原半島の南西部南串山町の西端にある国崎半島からさらに北東にのびた砂礫丘に立地する。第３図に示すように砂礫丘は嘴状に曲り、先端部に住吉神社の小社がある。南東側は内湾の砂浜で、北西側は、安山岩転石の岩礁海岸となっている。嘴状部の長さは、約250ｍ、幅100ｍ余、最も高い所で標高６ｍ余しかなく、低平で独特の地形である。



第１図　長崎県・国崎遺跡位置図



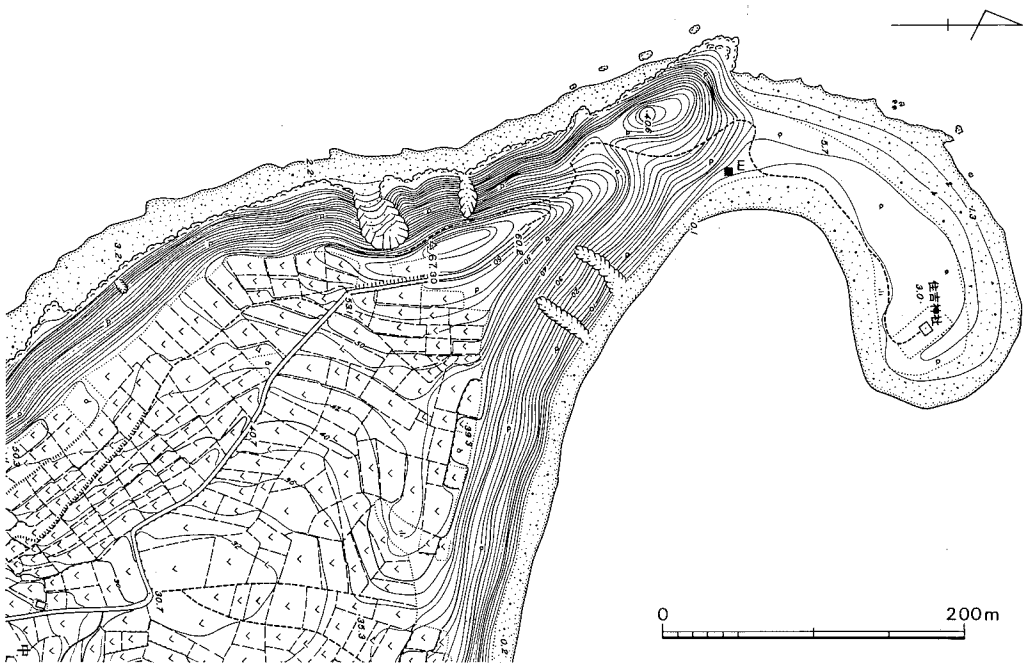
第２図　長崎県における国崎遺跡位置図

3．調査の概況

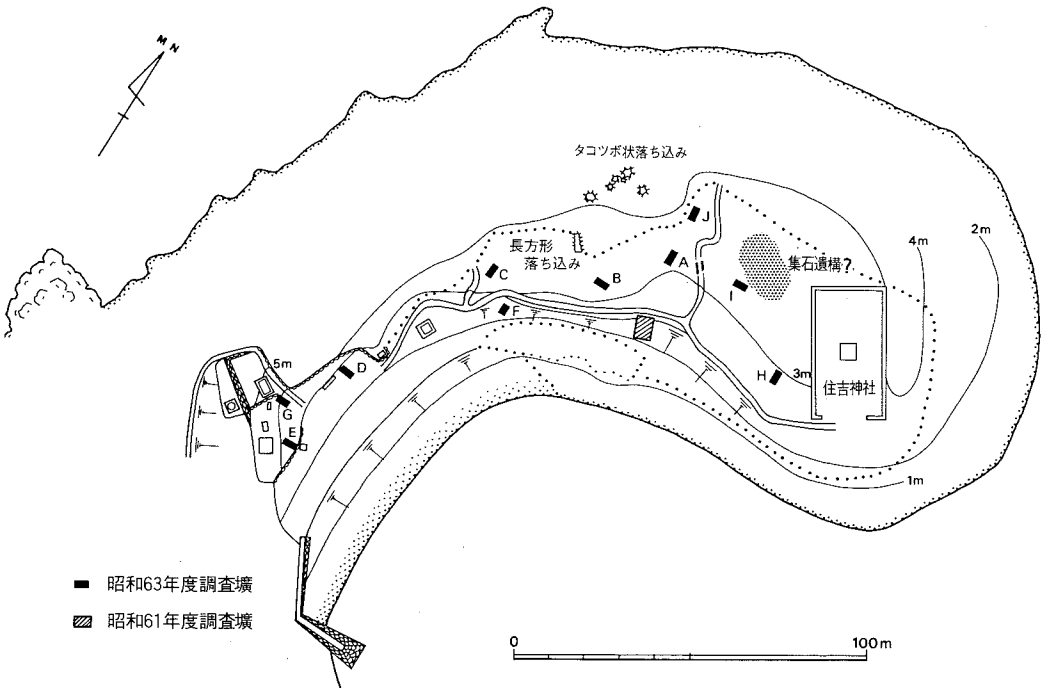
３ｍ×４ｍの試掘壙が９ヶ所２ｍ×３ｍの試掘壙が１ヶ所、計10ヶ所（Ａ～Ｊ区）が設定され78㎡の発掘が行なわれた。（第４図参照）

4．出土遺物の概況

今回出土した遺物は、土器が大半を占め、縄文時代の石器、貝類、獣魚骨、人骨、装飾品、



第３図　国崎半島と本遺跡（1／5000）



第４図　調査区域図

第1表　長崎県国崎遺跡貝類組成表

番号	種　　名	E区 砂層	E区 3層	E区 6層	計	%	生態 群型
1	*Tegula (Chorostoma) santhostigma* (A. ADAMS)　クマノガイ	113	172	603	888	19.12	Ⅳ
2	*T. (Umphalius) carpenteri* (DUNKER)　オオコシダカガンガラ	148	180	374	702	15.12	Ⅳ
3	*Monodonta labio* (LINNÉ)　イシダタミ	92	165	264	521	11.22	Ⅲ
4	*Tegula (Chlorostoma) lischkei* (TAPPARONE-CANEFRI)　クボガイ	90	100	312	502	10.81	Ⅳ
5	*Lunella coronata coreensis* (RECLUZ)　スガイ	93	149	248	490	10.56	Ⅲ
6	*Tegula (Omphalius) rusticum* (GNELIN)　コシダカガンガラ	15	26	244	285	6.14	Ⅳ
7	*Turbo (Batillus) cornutus* (LIGHTFOOT)　サザエ	89	59	102	250	5.39	Ⅴ
8	*Cellana nigrolineate* (REEVE)　マツバガイ	35	44	36	151	3.25	Ⅲ
9	*Thais bronni* (DUNKER)　レイシ	33	35	74	142	3.06	Ⅳ
10	*Barbatia (Savignyarca) obtusoides* (NYST)　カリネエガイ	44	43	53	140	3.02	Ⅳ
11	*Septifer (Septifer) bilocularis* (LINNÉ)　クジャクガイ	34	34	19	87	1.87	Ⅳ
12	*Littorina brevicula* (PHILIPPI)　タマキビガイ	2	4	67	73	1.57	Ⅲ
13	*Purpura (Mancinella) davigera* KÜSTER　イボニシ	10	4	55	69	1.49	Ⅳ
14	*Cyclophorus herklotsi* MARTENS　ヤマタニシ	8	13	38	59	1.27	Ⅶ
15	*Monodonta (Neomonodonta) perplevea* PISBRY　クビレクロツケ	11	8	11	30	0.65	Ⅲ
16	*Tectus (Tectus) pyramis* (BORN)　ギンタカハマ	6	9	12	27	0.58	Ⅴ
17	*Cellana mauritiana* (PIISBRY)　ヨメカガサ	5	8	10	23	0.50	Ⅲ
18	*Babyronia japonica* (REEVE)　バイ	8	14	0	22	0.47	Ⅴ
19	*Euchadra berklotsi* (MARTENS)　ツクシマイマイ	8	8	3	19	0.41	Ⅶ
20	*Venerupis (Amygdale) japonica* (DESHAYES)　アサリ	7	10	1	18	0.38	Ⅵ
21	*Nordotis discus* (REEVE)　クロアワビ	5	3	9	17	0.37	Ⅴ
22	*Tegula (Omphalius) migerrima* (GMELIN)　ヒメクボガイ	0	7	10	17	0.37	Ⅳ
23	*Pisania (Japenthria) ferrea* (REEVE)　イソニナ	1	1	13	15	0.32	Ⅲ
24	*Reishia luteostona* (HOLTEN)　クリフレイシ	0	5	2	13	0.28	Ⅳ
25	*Nordotis digantea* (GMELIN)　マダカアワビ	0	1	9	10	0.22	Ⅴ
26	*Crassostraea gigas* THUNBERG　マガキ	0	4	5	9	0.19	Ⅲ
27	*Procyclotus campanulatus* MARTENS　アツブタガイ	2	3	3	8	0.17	Ⅶ
28	*Meretrix lamarchii* DESHAYES　チョウセンハマグリ	1	2	5	8	0.17	Ⅱ
29	*Chicoreus asianus* KURODA　オニサザエ	2	2	1	5	0.10	Ⅴ
30	*Pugilina (Hemifusus) ternatana* (GMELIN)　テングニシ	3	1	1	5	0.10	Ⅴ
31	*Bostrycapulus gravispinasus* (KURODA et HABE)　アフブネ	1	0	2	3	0.06	Ⅳ
32	*Hiatulá boeddinghausi* (LISCHKE)　フジナミガイ	1	1	1	3	0.06	Ⅵ
33	*Gomphina (Macvidiscus) veneriformis* (LAMARCH)　オキアサリ	1	0	2	3	0.06	Ⅱ
34	*Mytilus coruscas* GOULD　イガイ	0	1	2	3	0.06	Ⅴ
35	*Kelletia lischkei* KURODA　ミガキボラ	3	0	0	3	0.06	Ⅴ
36	*Mactra chinensis* PHILIPPI　バカガイ	0	2	0	2	0.04	Ⅱ
37	*Notochione jedoensis* (LISCHKE)　マルオニアサリ	0	1	1	2	0.04	Ⅳ
38	*Ciassostrea belcheri* (SOWERBY)　イワガキ	1	0	0	1	0.02	Ⅴ
39	*Neverita (Glossaulax) didyma* (RÖDING)　ツメタガイ	1	0	0	1	0.02	Ⅱ
40	*Patelloida (Collisellina) saccharina lanx* (REEVE)　ウノアシ	1	0	0	1	0.02	Ⅲ
41	*Thelioslyla albicilla* (LINNÉ)　アマオブネ	1	0	0	1	0.02	Ⅳ
42	*Chama (Pseudochama) retroversa* LISCHKE　サルノカシラ	1	0	0	1	0.02	Ⅲ
43	*Cardita leana* DUNKER　トマヤガイ	0	1	0	1	0.02	Ⅴ
44	*Sabia conica* (SCHUNMACHER)　キクスズメ	1	0	0	1	0.02	Ⅷ
45	*Amygdala variegata* (SOWERBY)　ヒメアサリ	0	1	0	1	0.02	Ⅱ
46	*Spondylus cruentus* LISCHKE　チリボタン	0	1	0	1	0.02	Ⅲ
47	*Paganizaptyx subgibbera (Boettger)*　スグヒダギセル	1	0	0	1	0.02	Ⅶ
48	*Arca navicularis* BRUGUIÉRE　ワシノハ	0	0	1	1	0.02	Ⅴ
49	*Eragalatax calcareus* (DUNKER)　フトヒメヨウラクガイ	0	0	1	1	0.02	Ⅳ
50	*Mancinella lata* KURODA　ヒロクチレイシ	0	0	1	1	0.02	Ⅳ
51	*Novathaia sehencki* (NOMURA)　メオニアサリ	0	0	1	1	0.02	Ⅵ
52	*Batillaria multiformis* (LISCHKE)　ウミニナ	0	0	1	1	0.02	Ⅵ
53	*Anomia chinensis* PHILIPPI　ナミマガシワ	0	0	1	1	0.02	Ⅲ
54	*A. c. cylaeum* GRAY　アラナミマガシワ	0	0	1	1	0.02	Ⅲ
55	*Morulina musiva* (KIENER)　シマレイシガイダマシ	0	0	1	1	0.02	Ⅲ
		(37) 878	(37) 1122	(42) 2600	(55) 4642	100	

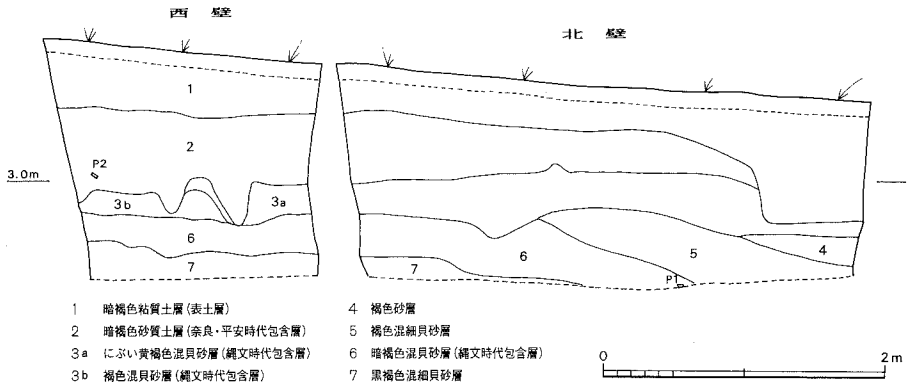
土錘、石鍋等が発見され、土器は奈良・平安時代の土師器、須恵器が多く、次に縄文土器がつづき、両者でほとんどを占め、この他、弥生土器、青磁、白磁も発見されている。

5．本遺跡の形成年代

以上の出土土器より、第4図、B、C、D？、E、G？区を縄文時代中～後期の遺物包含層として位置づけられた。

6．貝類資料の抽出と分析

貝類資料として分析の依頼を受けたものは、第4図、E区のもので縄文後期の包含層とされている。パンコンテナ2箱分の量であった。その内訳は、E区－砂層、E区－3層、E区－6層の3種でその抽出は、第5図、試掘壙断面の示す通りである。



第5図　E試掘壙断面図

7．貝類より見た遺跡形成時の自然環境の復元

本遺跡の貝類組成表は第1表で示した通り55種を記録した。内訳は腹足類（巻貝）33種、斧足類（二枚貝）22種である。生態群集より見た貝類は、第2表に示した。その74.55％が岩礁性で砂底海浜性、泥底干潟性は合計16.36％を含んでいる。川口汽水性は0％である。以上より遺跡形成時、附近に河川なく、小規模の泥底干潟と砂底海浜をかかえていたと考えられる。このことは現在現地で採集してもほぼ同じなることから、現地形とほとんど変っていないと思われる。現在、ハマユウやトベラが独特の植相を形成しているが、陸貝が7.27％をしめることから当時より樹相にはめぐまれていたと思われる。

第2表　国崎遺跡貝類生態群集表

生態群	E区砂層	E区3層	E区6層	計種数	%
Ⅰ．川口汽水群集	0	0	0	0	0
Ⅱ．砂底海浜群集	8.11	8.18	7.14	5	9.09
Ⅲ．上位乾性群集	21.62	27.03	28.57	12	21.82
Ⅳ．下位乾性群集	24.32	29.73	30.95	17	30.91
Ⅴ．水棲群集	27.03	21.62	21.42	12	21.82
Ⅵ．泥底干潟群集	5.41	52.41	4.76	4	7.27
Ⅶ．陸生群集	10.81	8.11	7.12	4	7.27
Ⅷ．着生群集	2.71	0	0	1	1.82
	100	100	100	55	100

8．各層間の変化

第2表を見るかぎり、貝類の層ごとの変化はほとんど認められない。砂層、3層、6層間において、環境が大きく変ったと見る根拠はない。むしろ上層に行くにつれ、水棲群集の増加が認められるが、より深い所に生息する貝類を求めての採集技術が進歩したと見るべきであろう。

9．本遺跡をのせる地形の形成

筆者が本遺跡で最も興味をひいたのは、この特異な地形と、どのようにして形成されたか、ということであった。陸繋島ではないかと考えたが、それを裏付ける根拠を見出すことはできなかった。国崎半島の先端部が崩壊し、その礫土が潮流により堆積し現在の嘴状礫丘地を形成したと考えられるが、その形成時期とその原動力は、縄文前期の海浸であったと考えている。その根拠は、本地において、縄文中期以降の遺物しか発見されないこと。その遺跡をのせる嘴状礫丘地の高さが高い所でも標高6mと、他の縄文前期海浸の海面上昇位とよく一致すること等をあげることができるが、決定的証拠は発見できない。

〈参　考　文　献〉

遠藤　邦彦（1967）：日本沿岸の過去2万年間の海水位変化、考古ジャーナル**6**、6－9

――――（1969）：日本における沖積世の砂丘の形成について、地理学評論、**42**、159－162

井関弘太郎（1968）：時代を異にする汀線高度の比較による地殻変動の考察、第四紀研究、**7**、(4)、171－131

――――（1957）：縄文早期ごろの海面とその相対的変化、名古屋大学文学部研究論文集、**17**、145－163

――――（1974）：日本における2,000年Ｂ．Ｐ．ごろの海水準、名古屋大学文学部研究論文集、**62**、155－176

成瀬　　洋（1965）：海水準変化の諸問題、第四紀研究、**4**、(2)、83－94

坂口　　豊（1963）：日本の後氷期海面変動に対する疑問、第四紀研究、**2**、(6)、211－219

――――（1968）：沖積世における関東平野中央部の陸化期の年代、第四紀、**7**、57－58

Sugimura, A.& Naruse, Y.（1954．55）Changes in see level seismic upheauals and coastal terraces in the suthern kanto region, Japan（Ⅰ）（Ⅱ）Jop. J. Geogr. **24**, 101－113, **26**, 165－176

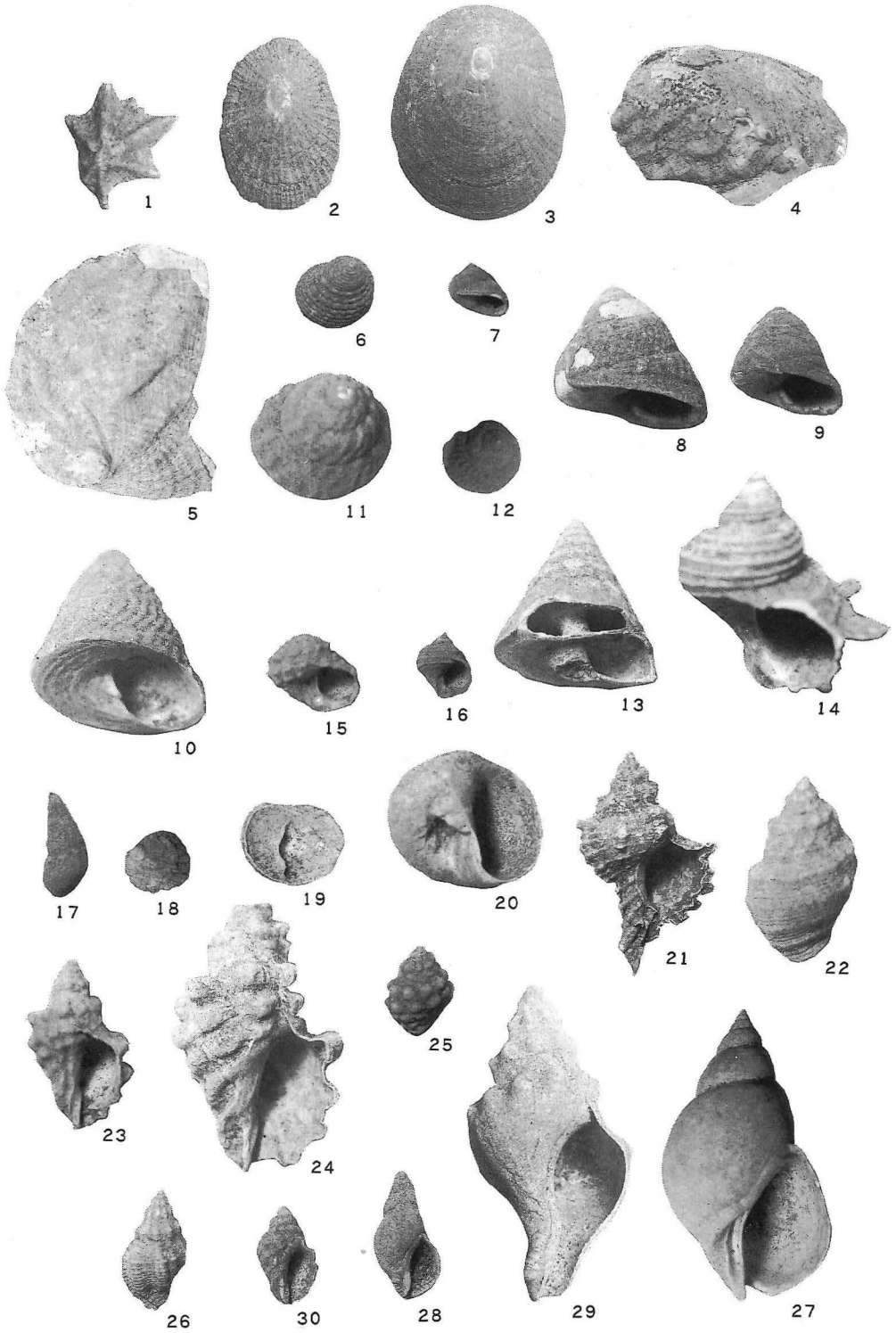
和島　誠一・麻生　　優（1964）：北九州における後氷期の海進海退について、資源研究所集報、(63)、64－73

――――（1969）：岡山県津島遺跡の地形的変遷、考古学研究、**16**、47－49

渡辺　直経（1969）：縄文および弥生時代のＣ－14年代、第四紀研究、**5**、157－168

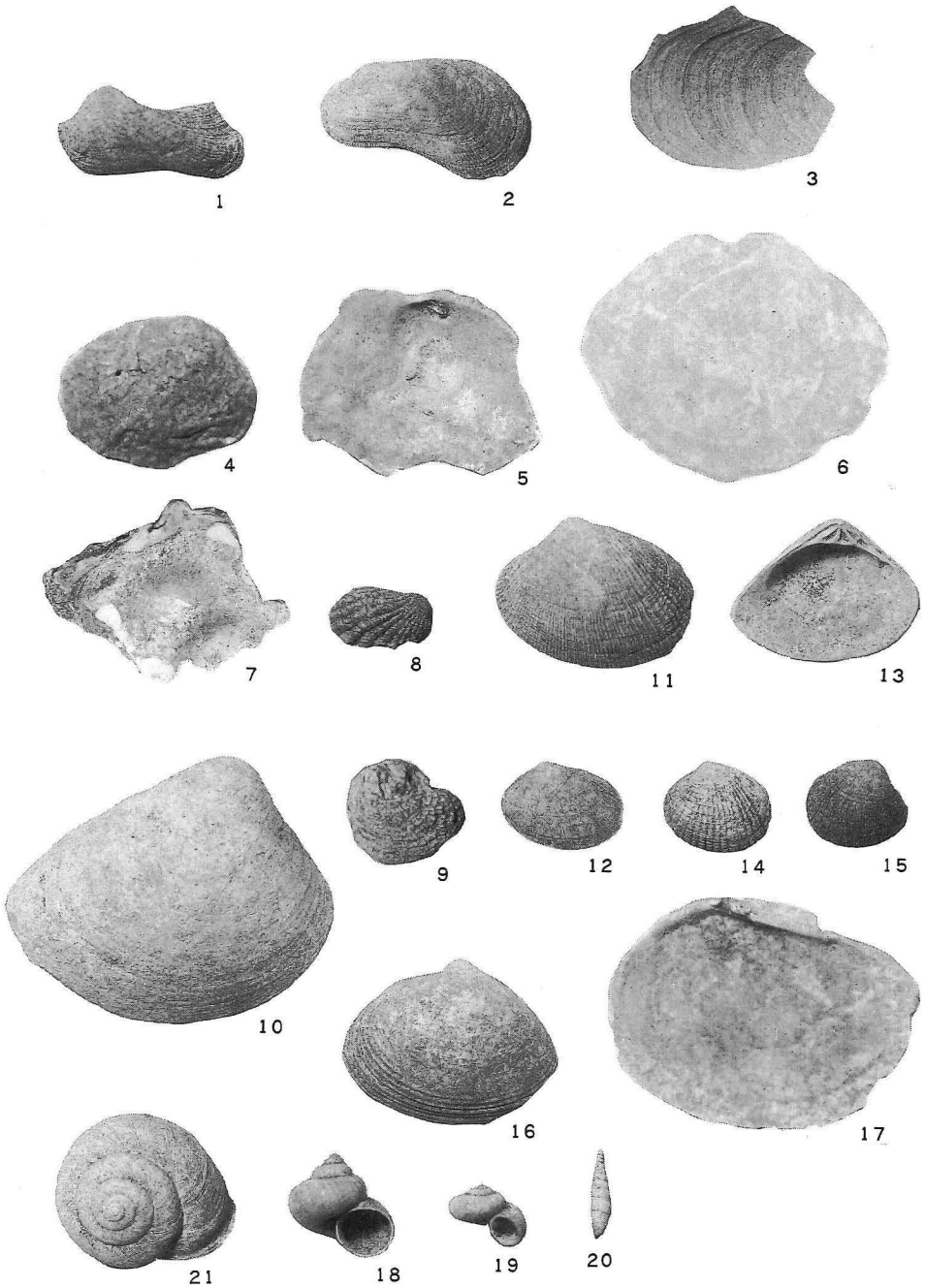
Pl. I

1. *Petelloida (Collisellina) saccharina lanx* (Reeve) ウノアシガイ
2. *Cellana mauriliana* (Pilsbry) ヨメガガサ
3. *C. nigralineata* (Reeve) マツバガイ
4. *Nardotis gigantea* (Gmelin) マダカアワビ
5. *N. discus* (Reeve) クロアワビ
6. *Monodonta labio* (Linné) イシダタミ
7. M. *(Neomonodonta) perplera* Pilabry クビレクロツケ
8. *Tegula (Chlorostoma) lischkei* (Toppavone-Lanefai) クボガイ
9. *T. (C.) santhostigma* (A. Adams) クマノコガイ
10. *T. (Omphalius) corpenteri* (Dunker) オオコシダカガシラ
11. *T. (O.) rusticum* (Gmelin) コシダカガンガラ
12. *T. (O.) migerrima* (Gmelin) ヒメクボガイ
13. *Tectus (Tectus) pyramis* (Born) ギンタカハマ
14. *Turbo (Batillus) cornutus* (Lightfoot) サザエ
15. *Lunella coronata coreensis* (Reelug) スガイ
16. *Littorina brevicula* (Philippé) タマキビガイ
17. *Batillaria multiformis* (Lischke) ウミニナ
18. *Sabia conica* (Schunmacher) キクスズメ
19. *Bostrycapulus gravispinasus* (Kuroda et Habe) アワブネ
20. *Neverita (Glossaulax) didyma* (Röding) ツメタガイ
21. *Chicoreus asianus* Kwcoda オニサザエ
22. *Mancinella late* Kuroda ヒロクチレイシ
23. *Reishia luteostoma* (Holten) クリフレイシ
24. *Thais bronni* (Dunker) レイシ
25. *Purpura (Mancinella) davigera* (Küster) イボニシ
26. *Eragalater calcareus* (Dunker) フトヒメヨウラク
27. *Babyronia japonica* (Reeve) バイ
28. *Pisania (Japenthria) ferrea* (Reeve) イソニナ
29. *Kelletia lischkeri* Kuroda ミガキボラ
30. *Marulina musiva* (Kiener) シマレイシガイダマシ


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30

Pl. II

1. *Arca navicularis* Bruguiere) ワシノハガイ
2. *Barbatia (Saviguyarea) obtusoides* (Nyst) カリガネエガイ
3. *Mytilus coruscas* Gould) イガイ
4. *Spondylus cruentus* (Lischke) チリボタン
5. *Anomia chinensis* Philippé ナミマガシワ
6. *Ciassostrea belcheri* (Sowerby) イワガキ
7. *Crassostraea gigas* (Thunbery) マガキ
8. *Cardita lanna* Dunker トマヤガイ
9. *Chama (Pseudochama) retroversa* Lischke サルノカシラ
10. *Meretrix lamarckii* Deshayes チョウセンハマグリ
11. *Venerupis (Amygdola) japonica* (Deshayes) アサリ
12. *Amygdala variegata* (Sowerby) ヒメアサリ
13. *Gomphina (Macridiscus) veneriformis* (Lamarck) オキアサリ
14. *Notochione jadoensis* (Lischke) マルオニアサリ
15. *Novathaca sehencki* (Nomura) メオニアサリ
16. *Mactra chinensis* Philippi バカガイ
17. *Hiatula boeddinghausi* (Lischke) フジナミガイ
18. *Cyclophorus herklatsi* Mortens ヤマタニシ
19. *Procyclotus camponulatus* Martens) アツブタガイ
20. *Paganizaptyx subgibera* (Boetlger) スグヒダギセル
21. *Euhbadra kerklotsi* (Martens) ツクシマイマイ


1
2
3
4
5
6
7
8
11
13
9
12
14
15
10
16
17
21
18
19
20

南串山町文化財調査報告書第２集

国　崎　遺　跡

平成元年３月31日

発行　長崎県南串山町教育委員会
〒854-07　南高来郡南串山町丙10263番地

印刷　(有)　出　島　印　刷　所
〒850　長崎市常盤町１番32号